

全日本医師剣道連盟報

— 第 34 号 —



葛飾北斎「凱風快晴（赤富士）」



全日本医師剣道連盟

連盟会長挨拶

全日本医師剣道連盟 会長 野見山すすむ



皆様、こんにちは。大変ご無沙汰しておりますが、恙なくお過ごしのこと、また修行に励まれていることとおもいます。

この1年間のなんとめまぐるしかったことか。国内外を問わず、正気の沙汰では無いと思われるようなことが平然と押し通される様子を見ると、目を覆いたくなる気分です。

全剣連の専務理事・理事長会議ではハラスメント対策がおおきくとりあげられていますが、剣道に限らず、というより武道、スポーツにかぎらず、あらゆる場面で問題となっています。さらに、カスタマーハラスメントにかぎらず、本来ハラスメントの被害者となるほうが、逆ハラをしかけるという状況さえみられます。

剣道には多くの、智恵の結晶である教えの言葉があります。「師弟同業」は師も子弟も同じ道を尋ねる、求める仲間であり、いわば同輩であることをしめし、更に「我以外皆我師也」は端的にこのことをしめしています。剣道の理念には「剣道は人間形成の道」、剣道修練の心構えには「礼節をとるとび、信義を重んじ、誠を尽くし」と続き、さらに剣道指導の心構えには「お互いを敬う心と礼法指導による節度ある生活態度を身につけ」とあります。剣道修行のどこにもハラスメントの発生する余地は無いとおもうのですが、現実乖離しています。剣道を学ぶ全ての人が、外国にいて剣道に憧れる人たちとともに、あるべき剣道修行を実践していきたいものだとおもいます。

先日、剣道形についてお話しをする機会がありました。剣道形研修会なので形指導は講師陣におまかせし、最近知った剣道形の歴史の一部をお話しました。

ご存じの通り大正元年に日本武徳会と東京高等師範学校が協議して、武徳会が主となって「大日本帝国剣道形」を制定（高野佐三郎著、剣道より）されました。その後、大正6年に加註、昭和8年「増補加註」。昭和27年全日本剣道

連盟発足し「日本剣道形」と名称改訂、昭和56年に現代文に改めた「日本剣道形解説書」が作成されています。この経緯のなかいろいろな意見が交わされたことを神戸医療福祉大学専任講師矢野裕介先生が剣道日本に紹介されています。とても面白いし、参考になります。

今回ご紹介するのは大正3年に高野佐三郎先生がしるされた「剣道」という著書の平成25年に現代語訳より抜粋させていただいた部分です。

このなかで高野先生は剣道の形は、剣道の技術のうち最も基本的なものを選んで組み立てたもの、と記されています。しかし、構えについては上段、中段、下段、八相、脇と5つの構えを紹介されつつ、八相と脇構えについては通常の稽古にはもちいないとしながらも、太刀4本目に採用されています。

特筆すべきは、この「剣道」のなかで、仕太刀は主位、打太刀は客位にあるもので、仕太刀はもっぱら自分の意に従って動作し、打太刀は仕太刀の働きを助けるように動作する」とあることです。この意を受けてか、1本目のかまえについて、「仕太刀は右足を出して右諸手上段に構え、打太刀は右足を引いて諸手左上段に取る」としるされています。また4本目でも仕太刀の脇構えについて「刀を右脇に取り、剣先を後方にして斜めに下に向け、左足を踏み出して構える」、打太刀の八相の構えについては「刀を立てて右肩に引き着け、拳と肩とをほぼ水平にし、右足を引いて構える」とあります。

「剣道」は大正3年に発刊されているので、大正元年制定の剣道形そのものを紹介されていると考えられます。矢野先生によれば、その後の大正6年の加註についての記録はあるとのことですが、私は残念ながら拝見したことがありません。また昭和8年の増補加註について資料がなかったものの矢野先生が発見され、発表されています。

どのような経緯で現在の剣道形解説書にいたったのかとても興味があり、是非全部まとめられたものを拝見したいなと思います。高野先生の説明には、剣道形は剣道の技術のうち最も基本的なものを選んで組み立てたもの、とされていますが、太刀1本目、2本目はともかく、それ以外は非常に高度な技が多く、時代の違いを感じます。また明治は44年間（45年＝大正元年）であることを考えると、大正元年に剣道形作成にかかわられた先生方のほとんどが江戸末期、各地で戦いのある中に生誕されたと推察されます。剣術＝刀を実際に使用した戦いの稽古、である時期をすごされ、戦いそのものを見聞されたこともあり、刀剣はじめ武具が身近にあった時代を過ごされていることから、いまの時代に学ぶ剣道形とはまた違った感覚があったのかもしれない。そう考えるとわくわくして、剣道形の考え方変遷に一層の興味がわきます。この時代だから

こそ、もしかしたら現代剣道でほぼありえない小太刀（小刀）のみを用いた実際の戦いかたもあり、小太刀の形が現実的であったのかもしれませんが。

ただ小太刀のみを用いることは、実践現代剣道では無いにもかかわらず、わずかに10本の形の中で3本を占める意味が別にあるという教えも受けました。40年以上前ですが私が18年にわたりご指導いただいた故棚谷昌美範士（剣道、居合道、杖道 三道範士）より、次のように教えをいただいた事があります。剣道形ははじめに太刀の形1～3本と小太刀の形1～3本が作られた。理由はこの各3本が剣道の修行の過程を表している。ともに1本目は相手の命を絶って勝つ、2本目は相手を傷つけるが命をその場で奪うこと無く勝つ、3本目は相手を傷つけることも無く、位の違いを示して勝ちを収める、殺人剣から活人剣への過程を示し、形には表せない次の位、太刀を持つことなく位で勝つ道へも示している。そののち剣道技術を示すものとして、太刀の形4～7本が作られた、という教えです。

さて、持田盛二範士（棚谷範士もよくご存じだったそうです）は遺訓に70歳になり心を動かさない稽古をした。80歳になり心が動かなくなった。だが、ときどき雑念が入る。雑念がはいらないように稽古している、と述べられているそうです。私も不動智が動かない心に通じると思い、稽古していますが、その前に、体のほうが全く動かなくなるのでは無いかと思いつつ、1日でも長く稽古を続けたいと願っています。

「剣道の理念」 来歴とその後について

公益財団法人 全日本剣道連盟 会長 真砂 威^{まさご たけし}



1. 剣道受難の時代

昨年、昭和20年（1945年）、先の大戦での敗戦から80年となる節目の年でした。わが国の敗戦は、日本古来の武道に壊滅的な打撃を与えました。武道はGHQ（連合軍最高司令官総司令部）から、国家主義、軍国主義に加担していたという理由で禁止され、指導的立場にあった人たちは公職追放という憂き目に遭いました。

また戦後の日本は、占領軍の指導のもと、戦前を完全に否定した教育改革が行われました。民主主義が強調され、他のスポーツはますます盛んになった一方で、武道は全く反対の道を辿らざるを得ませんでした。特に剣道に対する弾圧は最も甚だしいものがあり、風前の灯火といえる状態でした。

そして昭和22年（1947年）4月11日、極めつき「日本教育制度改革に関する極東委員会指令」が発せられます。

日本教育制度改革に関する極東委員会指令

（前略）すべての教育機関において、軍事科目の教授はすべて禁止さるべきである。（中略）剣道のような精神教育を助長する昔ながらの運動もすべて廃止せねばならぬ。体育はもはや「精神教育」に結びつけられてはならない。純粋な集団体操、訓練以外のゲームや娯乐的運動に、もっと力を入れるべきである。（後略）

これにより占領軍の剣道に対する弾圧の手は、まず学校剣道に対して加えられ、つづいて社会体育剣道に対する活動の制限などについて通牒が発せられま

した。

また連合軍当局は、文部省を通じて武道界の総本山である「大日本武徳会」に対し、解散命令を出させました。そうしてわが国における剣道の火が消えてしまいました。

その後、柔道、弓道、剣道という順に学校教育として復活を果たしますが、それらはわが国伝来の「武道」の名を冠することは許されず、「*格技」と呼び名され、スポーツの衣を着ての再出発でありました。柔道、剣道など、名称に「道」は付されていても、それは「道」の思想あるいは観念に根ざすものではなく、単なる競技種目名としての呼称にすぎないものでありました。

- * 「格技」という語は、「combative sports」の訳語として誕生したものである。「武道」という言葉が「military arts」と訳されるものならば、GHQが許可しないであろうということで、柔道、剣道などを総称して「格技」という名称を使った。戦後四十数年を経てようやく、平成元年の学習指導要領改訂により、名称が「武道」に戻ることとなった。

当時の占領軍による弾圧ぶりを明確に伝えている例を一つあげてみます。戦後、剣道を復活させようとする動きの中で、昭和25年（1950年）、関係者は再出発に際し「剣道」の呼び名が許されず、「*^{しない}撓競技」という名称で新連盟を発足させた経緯があります。

「しない」で打ち合う「競技」ということでの命名です。米軍が極端に日本刀を恐れたということから、「しない」という文字も「竹刀」を避け「撓」の字を使いました。

- * 昭和25年（1950年）3月、「全日本剣道競技連盟」を結成したが許可されず、やむなく考案したのが「しない競技」という名称であった。しない競技は、用いるしないも先の半分を十六割以上と規定し、剣道具も軽装化され、足がらみ、体当たり、発声も制限されるなど、よりスポーツ的側面を強調したものであった。また、連盟の名称も「全日本撓競技連盟」と称した。昭和27年（1952年）10月に全日本剣道連盟が発足し、しばらくは撓競技と剣道の二本立てで行われていたが、昭和29年（1954年）3月「全日本剣道連盟」に統合された。

もともと「しない」の語源は、撓^{しな}うからきており、「竹刀」と当てられたのは後からのことである。しかし、当時「撓」の字を使ったのはけっして復古を目指したものではなく、明らかに「刀」の字を使うことを憚ったものと解される。

柔道は創始者の嘉納治五郎がIOC（国際オリンピック委員会）委員でもあり、世界に柔道を広めた功績があったため、占領軍の理解も得られ比較的早く復活を果たしました。

いっぽう警察では、犯人逮捕という職務の特殊性から剣道の禁止は一時猶予されていました。剣道に代えて「逮捕術」をつくる、という理由により禁止を引き延ばしていたのです。そして、昭和22年（1947年）12月に「逮捕術教範」が制定されましたが、同教範を全国に行きわたらせるため2年間の布達期間を認めさせました。通牒「剣道の訓練中止」を発したのは昭和24年（1949年）11月になってからのことです。これは独立回復後の剣道復活をにらんだ用意周到な対応と言えるでしょう。

また警察では、剣道の訓練中止の期間にあっても逮捕術と直結させ、警棒や警杖訓練の名目で、暗黙裏になかば公然と剣道の訓練を行っていたとのことです。こういうことから警察は、剣道の命脈をつなぐ大きな役割を果たしたといえましょう。

2. 剣道の復活

昭和27年（1952年）4月、サンフランシスコ講和条約が発効し日本の独立が回復しました。これによって剣道が解禁となり、同年10月「全日本剣道連盟」（全剣連）が設立されます。

剣道の復活に当たっては、武道色を抜き、`完全な競技スポーツ、としての出発でありました。きっと剣道人にとっては不本意な船出であったことでしょう。しかし、その甲斐あって3年後の昭和30年（1955年）には国民体育大会（現、国民スポーツ大会）の種目となることができました。これによって一人前の競技スポーツとして認められたのです。

昭和39年（1964年）には先の東京オリンピックが開催され、柔道は正式種目となり、その競技会場として日本武道館が設立されました。そのとき剣道は、わが国古来のスポーツということで公開競技として参加いたします。日本武道館において約2時間半にわたり日本剣道形、試合、居合道、杖道、古流などを披露しました。

おそらく当時の剣道人の多くは、`柔道に続け、と、オリンピックを志向するものであったと思われます。

それと軌を一にして国際化を目指し、昭和45年（1970年）には国際剣道連盟が設立、第1回世界剣道選手権大会（1WKC）が日本で開催されました。

3. 「剣道の理念」の制定

こういった「競技化」「国際化」の流れの中で取り沙汰されたのが、`剣道と

は何か、です。「このまま競技スポーツ一辺倒のままでもいいのか」という問いかけのもと、剣道のあり方や目的を明確にするため1WKCの翌年の昭和46年(1971年)、全剣連に「理念委員会」が設けられました。

理念委員会では、まず「これからの剣道を正しく、立派なものにするには、何が必要であり、何を原点とすべきか」が議題に上りました。その結果、戦後の剣道は「刀の観念」が薄くなっているように思われるので、ぜひ「刀」という言葉を入れるべきだ、ということが全員一致で決まりました。

その当時としては、剣道禁止時代の影響が尾を引いており、「刀」という言葉を使うことに、なお憚る気持ちがあったわけです。しかし理念委員会では、「これはぜひ入れるべきだ」という結論を下しました。ここに「刀の観念による、正しく、たくましい人間生成の修錬であり、それが社会と文化の発展につながる」という方向性が固まります。そしてこれが「理念の核」となり、これをもとに3年余りにおよぶ審議を重ね、昭和50年(1975年)3月20日、「剣道の理念」(および「剣道修錬の心構え」)が制定されました。

剣道の理念

剣道は剣の理法の修錬による
人間形成の道である

剣道修錬の心構え

剣道を正しく真剣に学び
心身を錬磨して旺盛なる気力を養い
剣道の特性を通じて礼節をとうとび
信義を重んじ誠を尽して
常に自己の修養に努め
以って国家社会を愛して
広く人類の平和繁栄に
寄与せんとするものである

これはほかならぬ「武道」への復活宣言であります。これにより分断された「伝統文化」としての剣道が再生したといえましょう。

また「剣道の理念」を宣し、これが全国的に流布したことによって、オリンピック云々についてあまり話題に上らなくなりました。そして、国際基準に適応させようとする「国際化」という言葉もしだいに遠ざけられ、剣道を世界に

広めるという気概のもと「国際的普及」と呼ばれるようになりました。

4. 「剣道指導の心構え」の制定

しかしながら、この全剣連の期待に沿わず「剣道の理念」は、意外と若い剣士には知られていません。実際に「聞いたことも見たこともない」という青少年剣士が多いのには驚かされます。若年層の「試合勝利中心主義」による剣道の乱れが指摘されて久しいですが、「剣道の理念」を教えずして、これを嘆いてみてもはじまりません。これは偏に指導者に問題があると言わざるを得ないでしょう。

このことについて「*長期構想企画会議」において審議を重ねた結果、「理念」「修錬の心構え」が定められているにもかかわらず、この二つと並ぶ同じレベルに剣道の「指導」に関する基本的事項が定められていないことが、現場に定着しない要因になっているとの見解が出されました。

そして3年余りの討議を経て、平成19年（2007年）3月14日、「剣道の理念」の正しい理解を促し、指導現場の混乱を是正していく指針として「竹刀の本意」「礼法」「生涯剣道」の三本の柱からなる『剣道指導の心構え』を掲げることとしました。「剣道の理念」が制定されて32年後のことです。

- * 剣道界の長期的課題の発見と、剣道の普及・振興に関する企画立案を行うため平成15年（2003年）に設置された委員会である。

剣道指導の心構え

(竹刀の本意)

剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める。

剣道は、竹刀による「心気力一致」を目指し、自己を創造していく道である。「竹刀という剣」は、相手に向ける剣であると同時に自分に向けられた剣でもある。この修錬を通じて竹刀と心身の一体化を図ることを指導の要点とする。

(礼法)

相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。

剣道は、勝負の場においても「礼節を尊ぶ」ことを重視する。お互いを敬う心と形（かたち）の礼法指導によって、節度ある生活態度を身につけ、「交剣知愛」の輪を広げていくことを指導の要点とする。

（生涯剣道）

ともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める。

剣道は、世代を超えて高めながら学び合う道である。「技」を通じて「道」を求め、社会の活力を高めながら、豊かな生命観を育み、文化としての剣道を実践していくことを指導の目標とする。

5. 「剣の理法」とは

『剣道の理念』は「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」と謳っております。しかし、本当に剣道の稽古を日々続けることが人間形成につながるのでしょうか。剣道の修錬によって倫理観や協調性、また自己管理能力などが培われるのでしょうか。

否、『剣道の理念』が謳う「人間形成の道」は、そのような短絡的なものではありません。剣道の修錬と人間形成を結びつけるには一定の条件が必要とされます。その条件とは「『剣の理法』を修錬しなければならない」ということです。

では、「剣の理法」とは何か。

こういう問いかけに対し一昨年、令和6年（2024年）3月5日に「剣の理法説明版」が完成しました。今後は国内外に向けた案内や説明を推し進めるとしています。

『剣の理法説明版』

《本文》

「『剣の理法』とは、気剣体一致した打突を生み出すために心法・刀法・身法を一体としてはたらかせる理にかなった方法のことである」

《補足》

「気剣体一致した打突は、心法（心のはたらき）と刀法（刃筋・物打・鎧などが機能する刀・木刀・竹刀の適正な操作）と身法（体勢・体さばきな

どの身体の運用) とが一体となっているものである」

この「剣の理法説明版」は、「剣道の理念」の理解を深めるための一助として、その中核である「剣の理法」について全剣連の考えを明示したものです。

《本文》では「剣の理法」を定義し、《補足》では「心法」「刀法」「身法」を説明する基本的な用語を一例として、それぞれ括弧内に示しました。

実際の指導の現場では、指導者の裁量にお任せするものとします。ただし、この文言を丸暗記し、口移しに伝えても決して「剣の理法」を説明したことにはなりません。どうかご自身の剣道観や技量などに応じて「心法」「刀法」「身法」それぞれの括弧内に、習う人のレベルに適した内容や用語を用いて説明を施してください。加えて、実際に模範を示して見せることが大切です。

この「剣の理法説明版」が、皆様方の指導の手掛かりとして広く活用されることを期待いたします。

「剣道の理念」が制定されてから半世紀が経過いたしました。日々新たに、また日に新たなり、今ひとたび、この「剣道の理念」に思いをいたし、心の底に刻み込みつつ反芻し、人間形成の「道」をひたむきに歩んで参りましょう。

真砂威プロフィール

昭和21年（1946年）広島県生まれ

昭和40年（1965年）私立大阪高等学校卒業

昭和43年（1968年）近畿大学中退

昭和45年（1970年）兵庫県警察官拝命

昭和57年（1982年）兵庫県警察剣道教師

平成元年（1989年）同師範

平成5年（1993年）警察庁出向、警察大学校術科教養部教授

平成12年（2000年）同主任教授

平成18年（2006年）同術科教養部長

平成19年（2007年）警察庁退職

平成17年（2005年）全日本剣道連盟理事

平成18年（2006年）同常任理事

令和2年（2020年）同副会長

令和7年（2025年）同会長、現在に至る

静岡大会（第59回大会）告知

交剣知愛

第59回全日本医師剣道静岡大会「いいら！静岡」参加お誘い

第59回全日本医師剣道大会 静岡大会会長 笠松 紀雄



この度、第59回全日本医師剣道大会を令和8年（2026年）6月13日（土）14日（日）に静岡県藤枝市民体育館（以前告知した県武道館ではありません、ご注意を）にて行います（12日夜は稽古会）。現在粛々と準備を進めております。全日本医師剣道大会が昭和34年（1959年）に第1回が行われ、静岡県での開催は昭和56年（1981年）に第16回大会（内田智廉大会会長）が行われて以来45年ぶり2回目となります。全日本医師剣道連盟野見山すすむ現会長が現在の神

奈川県に来られる前に勤務なさっていたのが静岡県東部であり、この時宮原昇治範士から熱心なご指導を受け見事8段に合格されました。その関係もあり今回静岡県での開催をご依頼されたと思われまます。私自身、自分の生涯剣道に大きな影響を与えて頂いた全日本医師剣道連盟に恩返しを考えていましたので快諾させて頂きました。

【藤枝市】

藤枝市は静岡市から西へ20km、静岡県のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれた、歴史と文化の香りあふれるまちです。お茶の町として知られ山間部が茶園として開かれ昼夜の寒暖差が大きく香り高い銘茶が産出されます。現在世界的ブームの抹茶の原料となる「てん茶」生産が盛んであります。お土産に是非お勧め致します。歴史では江戸から静岡駿府城に拠点をうつした後の徳川家康ゆかりの史跡が多くあり、お時間がありましたら探訪をお勧めいたします。

アクセスは東海道新幹線静岡駅からJR東海道本線で20分、静岡空港から車／バスで30分で来ることができます。大会会場となる市民体育館は藤枝駅（周辺宿泊施設多数あり）から徒歩で約10分と良好な条件であることから



選択されました。今回皆様をお世話する立場の静岡県医師剣道家（写真2）は数が多くなく東西に長い静岡県に広く分布しているので、中央である藤枝市に集合しやすいという地理的理由もあり、また最も多忙な事務局担当の錬士7段北濱義博先生（写真3）が藤枝市内に在住のため藤枝市が選択されました。更に特記すべきは現在も5期連続で務められている北村正平市長が剣道教士7段、前藤枝市剣道連盟会長であり、今回藤枝市でのこの大会開催に深いご理解とご協力を得ることが出来たからです。今回、大会初日に日本剣道形演武を披露させて頂きますが、加藤純一郎錬士7段と森浩輝錬士6段の三重大学出身先輩後輩コンビによる息の合った演武を披露させて頂きます。静岡県は以前より羽賀忠利範士、井上義彦範士が日本剣道形の普及に力を入れており、日本剣道形優勝大会はその成果発表の場として昨年度に28回目を重ねるほど盛んであります。加藤、森の両氏は羽賀、井上門下の先生より日ごろ時間をかけて指導を受けてきました。今回その成果をご披露させて頂きます。

【自己紹介】

大会長の自己紹介をさせて頂きます。昭和30年（1955）北海道生まれの、東京育ち（昨年第58回大会が池澤清豪大会長により札幌で行われましたが、私は以前札幌に頻回にお邪魔していた関係で、すすきのでジングスカンを久しぶりに堪能でき感激しました）。中学1年に当時ブームだった漫画主人公の影響で剣道を始めました。中学高校と辛くも楽しい稽古を続けました。千葉大学入学後、全学と医学部両者の剣道部に入部し活動しました。春夏は両者の合宿が10日以上も続くことがあり、剣道三昧、若者ですので少し寂しい気も起きましたが続けました。卒業時は4段に昇段できました。試合成績は団体戦では自慢できる成績でしたが、個人戦は性格が蛋白であることが災いして東医体ベスト8が最高、あとは応援団長でした。卒業後は研修医時代、そして初期出張と多くの医師剣道家の皆様と同様に稽古から離れましたが、5年目大学院に入学した時に欠員の医学部剣道部監督を依頼されて、自分も稽古を再開しました。狭い医学部道場での精進は難しいことで部長と相談し、学生を自家用車に分散させて車で30分ほどのところにある鬼倉道場（故鬼倉國二範士8段、全日本医師剣道連盟でご活躍）へ毎週通い、付き添いだけでなく学生と一緒に指導を受けました。その結果5段に昇段しました。昭和60年（1985年）に第20回千葉大会が綿貫重雄大会会長によって行われましたが、私も大会運営委員として動員されました。この時、目の前の個人戦で鳥取県湯村正仁現範士と堀江貴先生の子弟による決勝戦を拝見し、30歳の私にとって大きな感銘を受けました。このことが後日私の生涯剣道再開に大きな第1の起爆剤となって働きました。

私は専門が呼吸器内科ですが臨床に戻ってからは多忙が続き、40歳過ぎまで剣道からしばらく遠ざかりました。関連病院出張で静岡県浜松市に来ました

が、縁があって大好きな地と臨床でこの地で永住できることになり現在に至っています。時々千葉大学に稽古で行きましたが、その時大先輩遠山富也先生（後の平成22年第44回千葉大会長）から全日本医師剣道大会の存在を知らされ、参加を強く勧められました。平成16年（2006年）第39回大阪大会（鏡山博行大会長）に初参加しました。会場には学生時代ライバルと（自分で勝手にですが）思っていた同年代前後の先生方の顔が多数みられ、30年前の東医体会場にフラッシュバックしたことを覚えています。そして学生時代から親しくさせて頂いている新潟大篠原先生（写真1）はじめ多くの先生方の継続修行した剣道のお姿に大きな感銘と刺激を受けたことが自分にとって第2の起爆剤となりました。会場での稽古では「お久しぶりです」と竹刀を通した挨拶を繰り返し、夜には学生時代ではなかった懇親会で直接、剣道の話、昇段審査の話、健康の悩み、プライベートな話など、交剣知愛そのものの世界が繰り広げられ、毎年この大会への参加がその年の第1目標となり連日稽古を励むこととなりました。皆様の経験談や励ましで何度危機を切り抜けることができたか感謝の念に堪えません。7段を55歳の時に拝受して早くも15年経過し、最近健康面でも色々と支障が生じていますが、千葉大後輩剣士の新藤寛、尾辻瑞人先生たち（写真4）にいつも尻を叩かれ稽古を何とか継続しており、幸せな生涯剣道と実感しています。今後ともよろしくご指導お願いいたします。



写真1



写真2



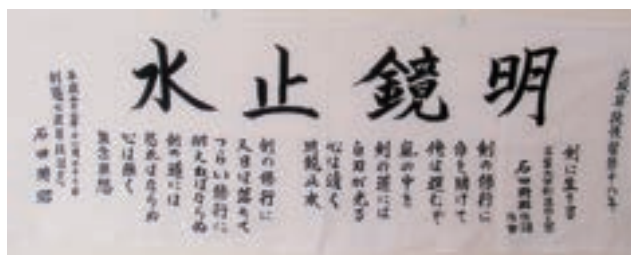
写真3



写真4

【明鏡止水】

今回記念品として差し上げた手拭いの揮毫文字「明鏡止水」についてご説明致します。私は毎回の稽古はじめと終わりに行う静坐が大好きで、道場によって号令される「黙想」（黙して考える）よりも、無念無双で頭をゼロにしリフレッシュする意味で「静坐」は好きな言葉です。日常の生活、勤務、対人関係でストレスを抱えた医業従事者として、疲れ果てて道場に入ってから数秒～数十秒静坐するルーチンが自分の人生にとってこれまでとてつもない支援となっていました。最近、テレビなどのタイトルに「明鏡止水」が登場し有名になっていますが、この言葉は60年前より我が母校千葉大学剣道部の部歌に登場しており馴染みのある言葉でした。曇りのない鏡と静止した水のように、心に邪念やわだかまりなく、澄み切って落ち着いた境地を指す禅語とされていますが、皆様もご経験のように試合や審査にこの境地を持ったまま臨めるか否かで結果が大きく異なることを経験した方も多いと思われれます。以上の2つの言葉は生涯剣道にとって最後までお付き合いする運命と思われ記念の揮毫とさせて頂きました。



【交剣知愛】

最後に、大会長以下皆で力を合わせて運営いたします。医業のみの狭い世界から剣道を通して様々な世界の剣士と交流し一つしかない人生を奥の深いものに高めている我々全日本医師剣道連盟は素晴らしい世界と思われれます。この交剣知愛、生涯剣道の実践の場として楽しい大会を目指して本大会を計画していきますので、ご協力のほどをよろしくお願い致します。

今回大会運営に際しご多忙の中、いつも励ましを頂いている野見山すすむ会長、大会運営実務に様々なアドバイスを頂いている塚原清彰先生に深謝いたします。



第59回全日本医師剣道大会 静岡大会プログラム

2026年6月12～14日 藤枝市民体育館 藤枝市武道館

主催：全日本医師剣道連盟

後援：全日本剣道連盟、静岡県剣道連盟、藤枝剣道連盟、藤枝市

スケジュール

第0日目 **12日** (金) 19:00-20:00 有志による稽古会：藤枝市民体育館、藤枝剣道連盟と合同で

第1日目 **13日** (土)

8:30 開場 自由稽古 藤枝市**武道館**

9:00 受付

10:00 剣道教室 範士小山正洋先生 自由稽古

12:00 昼休憩 自由稽古 藤枝市民体育館

12:40 審判会議 藤枝市武道館会議室

13:00 **開会式**、日本剣道形 (打太刀加藤純一郎、仕太刀森浩輝)

13:30~15:30 **個人戦** (年代別予定)

15:30~16:30 **稽古会 (県内八段参加)**

17:00 幹事会 藤枝市武道館会議室

19:00~21:00 **懇親会** (ホテルオーレ藤枝)、表彰式

第2日目 **14日** (日)

8:30 開場 集合写真 藤枝市民体育館

9:00~9:30 **八段模範演武**

9:30~11:00 審判会議 藤枝市民体育館 **団体戦** (出身大学地域別予定)

11:00~11:45 **全員稽古会**

11:45~12:00 **閉会式**、表彰式、解散

模範演武（案） 2分30秒

大会2日目2026年6月14日日曜9：00～

1 立会 範士 小山 正洋 先生

赤 教士 吉留 秀俊 先生 白 教士 藤原 広臨 先生

2 立会 教士 宮坂 昌之 先生

赤 教士 福嶋 克尚 先生 白 教士 三條 貞夫 先生

3 立会 教士 野見山 すすむ 先生

赤 範士 小山 正洋 先生 白 教士 池澤 清豪 先生

4 立会 教士 福嶋 克尚 先生

赤 教士 二橋 高弘 先生 白 教士 宮坂 昌之 先生

5 立会 範士 小山 正洋 先生

赤 範士 宮原 昇治 先生 白 教士 野見山 すすむ 先生

第58回全日本医師剣道大会 in 札幌を終えて

2025年 札幌大会会長 池澤 清豪



令和7年（2025年）6月13日～15日、札幌大会を北ガスアリーナにて開催し、皆さまの参加のお陰で無事、やり遂げることができました。ありがとうございました。

前々回の新潟大会で2年後の札幌大会が決まり、会場の確保や北海道剣道連盟・札幌剣道連盟の挨拶など準備を始めたのは前回の神奈川県大会が始まる直前からでした。

ここ札幌において皆さまに楽しんでもらうことを3つ掲げ、そのもとに進行させていただきました。

1つは剣道界で超有名な剣士（古川和男先生・佐賀豊先生・栄花英幸先生・林朗先生・栄花直輝先生）そして北海道八段（残り10名といっても私以外全日本クラスで優勝している先生ばかり）の先生と竹刀を交える。2つ目は団体戦での試合の盛り上がりをつくる。3つ目は懇親会の盛り上がり。この3つを掲げていました。

付録としては14日15日の札幌剣道連盟主催の朝稽古6時から7時15分に参加し、数多くの北海道剣士と交流してもらったことでした。

13日は夕方から稽古、なんと埼玉医大の師範として遠藤正明先生（元警視庁師範）が稽古している姿を見つけ、もうびっくりでした。嬉しかったです。こちらからは上席として古川和男先生をお呼びしていました。そこに野見山先生・宮坂先生・私と元立ちになり稽古会が始まりました。

ただ、稽古場を確保する上で事前にハガキでチェックしていましたが、その倍近くの人数がきたものですから、おしくらまんじゅう状態になってしまい申し訳なく思っています。都市での開催は意外と会場費が高く、ここでケチったのが間違いでした。

第二道場としてジンギスカンパーティ。今度は出欠のハガキより10人以上が

欠席。店には予約しているので会費は払わなくいけなく、これまた大変でした。だからといって後でもらうわけにいかず、泣き寝入りです。

14日は大会初日。開会式が終わり、八段との模範稽古、模範演武、範士模範演武に。まず模範稽古では前・神奈川大会・個人戦で優勝した5人を選抜。まず炭屋尚宏教士八段（元特錬、全日本剣道選手権）が井上雅史先生（40代）、大岩真先生（50代）と対戦。二人のきびきびした動きとてもよかったです。次に私が新藤寛先生（60代）、堀江貴先生（60代）、椛島悌蔵先生（70代）と対戦。攻めからの打突上手でした。つぎに模範演武にて我らの医師としてのお手本すべき野見山延先生が宮坂昌之先生、三條貞夫先生と。風格のある演武でした。林朗先生と台湾・韓国の代表と対戦。やはり剣風が違うのか少しやりにくそうでした。最後は、2週間前に範士の称号を得たばかりの二人の対戦。佐賀豊先生と栄花英幸先生。これぞメインイベントに相応しい迫力ある立ち合いでした。北海道でも公式ではなかなか見ることができません。良かったです。

その後は、個人戦がありました。その結果は実行委員長・森孝之先生の方から報告あると思います。

昼から、佐賀豊先生と栄花英幸先生の日本剣道形。私も色々剣道形を見てきましたが、二人の剣道形は日本の5本の指に入ると思います。素晴らしい気迫でした。

次に栄花直輝先生の剣道教室の予定でしたが、当日の朝、ぎっくり腰となり、直輝先生の兄、栄花英幸先生に交代。英幸先生は現在全日本の方で指導を行っているので指導の仕方はとても上手です。余談ですが直輝先生とは指導の仕方は異なるので、野見山先生が懇親会の席上で、今年の3月に大阪で全医剣の稽古会にて直輝先生の剣道教室をお願いし、了承を得ていました。

その後は、北海道八段範士・教士そして医師剣の八段が元立ちとなり稽古会。十分に汗をかくことができました。

夜は懇親会。皆さん一通り挨拶が終わり、祝宴がはじまりました。BGMに船越匠先生の奥さんにバイオリン演奏をお願いしていました。やはり。案の定、BGMを打ち消すような談笑。北海道剣道連盟会長・武田牧雄先生と野見山先生だけは代表者として申し訳なさそうに演奏者にできるだけ振り向いていました。この会に品のあるクラシックの演奏は必要ないかもしれません。雑踏のなか皆さんはというと四天王（古川・佐賀・栄花英幸・直輝先生）の周りを囲んで我先にという感じで写真撮りです。やはり剣道界の憧れのスターは違うものです。因みに私に来てくださったのは3人でした。医者への剣道界においても、弱すぎて憧れには当てはまらなかったようです。残念笑。

懇親会も最高潮に立ったとき、半紙たし段・船越匠先生と狂死かけ段・毛糠捻貴先生の日本酒剣道形です。始めると同時に、先ほどのざわめきは静まり、皆さん舞台に集中しているのです。人間は面白いものは好きなんですね。そして、バカ受けでした。彼らは良く短期間でここまで出来たと思う。最高の演武？でした。多分、彼らは大学で医師として生活をしているので薄給です。今後いくばくかの謝礼が頂ければどこでも出張演武をしますのでよろしく願います。東大の形成外科の医者のようにソープランドまでは強要しません。基本真面目な二人なので笑。

15日、朝。最終日。二日酔いではあるが「責任を果たすまで、あと少し」と思いつつ席につきました。

まずは80代の拝見試合。加野資典先生、伊藤保憲先生、中山尚夫先生。皆さん元気である。私は若い頃、80代の先生方の姿をみて感動することなかった。それより「年を取ったらこんなものか」と。今思うと大変失礼な見方をしていたものである。

私は今72歳、身体のあっちこっちが悲鳴を上げている。先月は両ひざの関節鏡をし、半月板の処置をしてもらった。膝の軟骨はすり減り、さらに大きな手術が必要であることはわかっている。正座はできない。心臓も大動脈弁閉鎖不全、高血圧などなど。病気のデパートである。これが10年後、剣道できるかどうかどうかも不安である。そんな中、この三人はしっかり生涯剣道を続けている。この年になって、3人の素晴らしさに頭が下がる。尊敬と同時に目標にしたい。

さあ7人制の団体戦です。大会のパンフレット直前までメンバーの構成を決めるのに非常に難しく日にち・時間も要し、何度も組み合わせを考えました。これでメンバー表が決まったかなと思うと、急に出席しますとか欠席しますとか、そのたびにメンバー表を大幅に入れ換えしなければいけませんでした。そのため、どうしても自分の県以外のメンバーとなったり、寄せ集めのようなメンバーになったりチームもあり、申し訳なく思っています。それでもやはり団体戦は盛り上がるのでとても楽しい試合となります。今回も大変盛り上がりました。

今回、団体では北海道チームが優勝しましたが、ここだけの話、本当に強いのは1人しかいませんでした。あとは各人最高のパフォーマンスを発揮し、さらに地元の勢いで勝利を掴んでくれたと思います。私自身、最後のフィナーレを北海道が優勝で飾ってくれて涙が出るほど嬉しかったです。感謝です。

閉会式、それぞれの結果発表、そして表彰式が終わり、誰一人ケガもなく「これにて第58回全日本医師剣道大会を閉会します」の言葉とともに、ようやく安堵感に包まれました。

何事にもきちんとしたことができない私が、なんとか無事に終えることができたのも、ほんとうに皆さんのお陰です。改めて感謝いたします。ありがとうございました。

□追伸：好評発売中：皆様ご購入をお願いします



39歳三段リバ剣、65歳八段挑戦、69歳9回目で合格。永遠の若大将を自負する整形外科医が、自ら綴る笑いあり涙なしの合格不合格体験記。諦めず継続すれば桜咲く。大いに笑い、感銘を受け、発見することでやる気生まれる。元気が出てくる、勇気もらえる。あなたの心がゆさぶられる、おもしろくためになる痛快剣道エッセイ！



幸運にも八段合格を果たした著者。新たな扉は試練の扉だった。この八段の修行ではいろいろな問題に直面することとなった。真の八段をめざして精進する成長体験記は八段合格を期する人々への第一弾からアップデートしたエッセイだ。

情熱を失ってはいけない。不合格は人生の失敗ではない。失敗の原因に気づいても改めないのが本当の過ち。

情熱を失わず剣道で自分を磨いて人の役に立つと、剣道が楽しくできることになる。

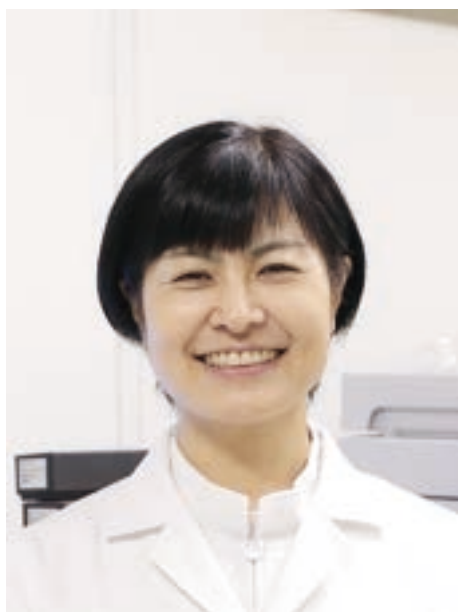
それが「剣道ができる」ということであり、ひいては人間形成にもつながっていくのであった。

札幌大会個人戦優勝者

女子の部

「背中」に残る札幌大会

越智 小枝



2025年6月に札幌で行われた医師剣道大会。個人的な話となりますが、その週はいつにも増して、ちょっとだけ、過酷なスケジュールでした。月曜日に剣道の合宿の帯同医@静岡、火曜日は診療の後200km運転でいわきに向かい、懇親会。水曜・木曜は福島第一原子力発電所構内で作業員の方々を対象とした講習会（+懇親会）。そのまま南相馬に移動し、金曜日に外勤を終えた後に、仙台空港から空路で札幌入りをしました。まあ皆さん似たり寄ったりだとは思いますが、結構疲労困憊となりました。そんなわけで、疲労のためか、2（3）日酔いのためか、実は試合そのもの

に関しては記憶が朧です。

記憶が朧なもう一つの理由は、3人のリーグとはいうものの2試合ともに判定勝ち、という後味の悪さにもあると思っています。秋山先生・高梨先生の妙技に翻弄され、年齢差などを考慮すれば、もう「負け」と言ってよいのでは…と思ってしまった記憶があるような、ないような。勝てた、と思った印象が薄すぎて、優勝したことを危うく忘れておりました。むしろ、まだまだ力に頼って振り回しているだけの剣道なのだな、という反省だけは残っております。

さらに反省したのは、その後の団体戦での韓国選手との試合です。お相手は経験年数としては短いようでしたが、力に押されて残心を決めきれませんでした。動きの無駄を思い知らされる試合だったと思っています。そんな反省ばかりの大会でしたが、そのおかげでその後の栄花英幸先生の稽古会では、身の入った基本打ちの稽古ができたのではないかな？と思っています。懇親会では急性腰痛で欠席された栄花直輝先生が8段戦優勝カップを持ってきてくださっていて、これを肴に（おそらく）しこたま飲みました。…もしかしたら試合の記憶が朧なのは、このためなのかもしれません。

そんな感じで大会自体の記憶は曖昧ですが、日曜日の大会を終えて仙台空港

から 300km ドライブで東京の自宅に辿り着いたときの背部痛だけは、今も鮮明に覚えております。翌日の当直中、背部痛のあまり七転八倒しておりました。人生を十分に楽しむためには、もう少しだけ体力が必要だな、と感じる今日この頃です。色々な面で未熟者ですので、引き続きご指導のほど、よろしくお願いたします。



札幌大会個人戦優勝者

20代30代40代の部

第58回全日本医師剣道大会 in 札幌に参加して

吉田 悠人



このたびは全日本医師剣道大会個人戦（20代・30代・40代の部）において優勝という栄誉を賜り、誠に光栄に存じます。大会運営にご尽力いただきました全日本医師剣道連盟の諸先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本大会に参加したきっかけは、普段より共に稽古に励んでいる後輩からのお誘いでした。これまで北海道を訪れたことがなく、良い機会になると感じたこと、また試合に出場する機会が以前に比べて減っていたこともあり、挑戦の意味も込めて参加を決意いたしました。

大会期間中は、北海道を代表する先生方より直接ご指導を賜り、大変貴重な経験となりました。なかでも栄花英幸先生の基本指導は、足さばきや打突の機会の大切さを改めて見つめ直す契機となりました。もうひとつ強く印象に残っているのは、若生大輔先生と稽古をさせていただきましたことです。第56回（2008年）全日本剣道選手権大会の決勝は、私にとって最も印象深い試合の一つであり（上段を志したきっかけが当時優勝された正代賢司選手に憧れてでした）、その試合の当事者である若生先生に稽古をつけていただいたことは、感慨深い経験となりました。大きな体躯から繰り出される速く重く鋭い打突に圧倒され、日本を代表する先生方の剣道を間近で体感できたことは、何よりの財産となりました。

試合に関しては、個人戦は決勝まで五試合を戦い、決勝戦を除き試合時間は二分間と短く、判定による決着もあったため、足を止めず、わずかな機会を逃さないことを意識しました。想像以上に体力の消耗が激しく、日頃からの体力づくりの重要性を痛感いたしました。団体戦では、普段稽古をともにする仲間、そして大学の先輩である堀江貴先生と同じチームで戦うことができました。全日本医師剣道大会だからこそ実現したチームであり、結果以上に心に残る経験となりました。

今回初めて本大会に参加し、日々診療に従事しながら剣道を継続されている先生方が数多くおられることを知り、大きな刺激を受けました。学生時代のように毎日稽古ができる環境にはありませんが、細く長く剣道を続けていくことを目標に、今後も研鑽を積んでまいりたいと存じます。

末筆ながら、全日本医師剣道連盟および本大会のさらなるご発展と諸先生方のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



同じ鳥取大学出身の先輩方
堀江 貴先生、井上雅史先生



懇親会にて
栄花直輝先生との記念撮
影。
普段一緒に稽古をしている
仲間と撮っていただきました。

札幌大会個人戦優勝者

50代の部

まさかの優勝

武石 浩欣

第58回全日本医師剣道大会 in 札幌、50代の部で優勝させて頂きました。

2024年七段審査が、まさかの1発合格で、人生の幸運を全て使い果たしたと思っておりました。2025年に医師剣道大会で優勝することが出来、2回目の奇跡が起きました。

今回50代の部の参加者50人のうち、21人が、韓国、台湾、ドイツの海外の先生です。全日本医師剣道大会から、全世界医師剣道大会に名称変更が必要そうです。優勝までに韓国、台湾の先生とそれぞれ対戦となりましたが、トリッキーな海外特有の剣風に気をつければ日本人よりは対戦しやすいと思います。今回のトーナメントの組み合わせで、2回戦で、第一シード、愛知の強豪、増田健太郎先生と当たるはずでしたが、増田先生は参加してない？のか不戦勝となりました。

あれよあれよと勝ち進み決勝進出となりました。

対戦相手は、第二シードの三重、中山敦史先生です。中山先生は、違うコートで、試合されていたため、そちらの会場は全く見てなかったため、中山先生の試合を全く拝見しておりませんでした。本当に試合が始まるまで、誰と対戦するのか分からない状況であり、何も考えず試合したのがかえって良かったのかもしれない。事前に見ていたら、ビビって身体が動かなかったかもしれません。

そんなこんなで気づいたら優勝しておりました。

今回、優勝できたのもラッキーでしたが、この大会では、色々嬉しいことがありました。

大会前日の稽古会で、審判長の古川和男先生と稽古お願いすることができました。古川先生は私の高校の恩師、東海大相模高校の木田誠一先生と、東海大学で同期の先生で一度稽古お願いしたいと思っておりました。大会の表彰式で、古川先生にご挨拶したところ、さすが、木田の教え子やな、いい試合だったけど、結構反則多かったぞと注意されました。古川先生と稽古、お話しできただけでも、貴重な時間でした。また私の試合会場で、審判をされていた、栄花直輝先生、岩橋亮典先生から、準決勝前に兄ちゃん、東海大やろ？と声がかかりました。そうです、私の兄は東海大体育学部武道学科で、両先生の2つ先輩なんです。剣道が、武石先輩に似とるなあ。優勝できるよ。と声をかけてい

たたぎ、いつも以上の力が準決勝で発揮出来ました。

また大会後に佐賀豊先生と稽古させて頂き、ご挨拶したところ、佐賀先生は、私が当時、町田で指導受けていた田中陽介先生のPL学園の後輩だそうです。すごくいい剣道してるよ、さすが田中先生に指導受けてるだけあるね、と褒めていただきました。

この大会期間中、海外の先生、北海道の先生方と普段触れ合う事のない先生方と交流出来、本当に参加して良かったです。剣道は歳を取っても長く続けられて改めて素晴らしいものだと再認識しました。

元々、美味しいものが多い北海道が大好きでしたが、より好きになりました。



札幌大会個人戦優勝者

60代の部

試合と稽古についての考察

中村 茂樹（新潟）



全日本医師剣道連盟には毎年各地で貴重な試合や稽古の機会をいただき、一会員として心より感謝しております。昨年の札幌大会で優勝させていただいてから1年経ちますが、お陰様で元気に剣道修行を続けています。いくつか頭に浮かんだ箴言をもとに、試合と稽古について考察してみました。

「勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし」

（松浦清「常静子剣談」）

去年は俗にいう当たり年で、半年間に計4回「不思議の勝ち」を経験しました。全日本医師剣道大会個人戦60歳代（6月札幌市）、全日本高齢者剣友会長野稽古会個人戦60歳代（10月長野市）、新潟県剣道大会個人戦60歳以上と同団体戦（10月新潟市、団体戦は新潟市チーム大将として参加）での優勝です。過去の入賞は数年に1度程度だったので、私にとりこれは出来過ぎでした。

しかし紅花杯（10月山形）、新潟県実業団大会（11月新潟）では、前半に勝ちを確信しながらも後半に手痛い逆転負けを喫しています。勢いに乗ろうとして、勝ち急いでしまったと反省しています。

勝った喜びがその時をピークに減衰していくのに対し、負けた悔しさは寄せては返す波のように反芻されます。打って反省、打たれて感謝、この反芻する姿勢こそ我々の剣道修行に重要な作業ではないでしょうか。

「試合と審査は 真剣な修行ができる二つの機会」（小林英雄範士）

「人間いつも真剣になれるものではない、その点試合と審査では否応なく真剣になる、だからこの二つには積極的に参加した方がいい」と続きます。試合や審査は絶好の勉強の機会と考えて、積極的に参加することを心掛けていま

す。

「勝負は一瞬の業 稽古は千日の業」(岩立三郎範士)

七段審査に苦勞していた頃からほぼ10年近く、毎朝短時間のひとり稽古(素振り)を続けています。休むこともあります、少し経つとまた始めます。「軽いひとり稽古—朝食—朝風呂—出勤」が私のモーニングルーティーンです。剣道のほか歌と英会話も習っているので稽古は平均週3回程度ですが、とにかく継続は力なりと考えています。ほかに地元の山田義雄八段の人脈で、年に数回、県外遠征や県外から来られた八段や範士の先生からお稽古を頂く機会があります。地方剣士にとって、こういう機会は貴重です。いい稽古ができると、また頑張ろうと元気が出てきます。

「剣道は二人で創り上げる芸術である」(中里誠範士)

2016年茨城大会での出会いからご当地の中里誠範士との交流が生まれ、おもに手紙やSNSで今日にいたるまで実に多くのご指導をいただきました。もし茨城大会に参加しなかったら、中里範士の列に並ばなかったら、終わってご挨拶に行かなかったら……その後の剣道観の変化、七段合格、今回を含めて大会での優勝などは、どうして私には起こらなかったことでした。古典文献からAI問答に至るまで膨大なご研究の一端を示して下さい、深く豊かな剣道の世界を教えてください。その中心にある範士の理念はおそらく合気とか阿吽と言われるもので、上記の剣道観であると直感します。

「飛ぶために生きろ」(小林陵侑選手、スキージャンプ)

競技は違いますが、小林選手(W杯優勝35回)が常々後輩に言う言葉だそうです。曰く「日常生活の流れがジャンプに出る。日常生活をきちんとしないと、いいジャンプはできない」。ジャンプを剣道と言い換えても、よく理解できます。当たり前のことを当たり前にする、適切な言葉遣い、正しい歩き方、ちょっとした所作に至るまで気をつけないと、本当の剣士にはなれないのでしょう。まだまだ自分は未熟と感じる事ばかりです。

剣道では「いいメンを打つために生きろ」でしょうか。武道がスポーツと異なる点は、最終的な目標だと思います。究極の「いいメン」とは相手を打突するだけでなく、自分に打ち克って相手と阿吽の呼吸を通じ、自分も相手も観衆も感動する形而上学的なレベルの打突を理想としていることだと思います。



札幌大会個人戦優勝者

70代の部

札幌大会個人戦優勝者より（70代の部）

諸木 浩一

鹿児島県の諸木です。

第58回札幌大会での70才台の部で優勝することが出来ました。

前回の神奈川大会より年代別個人戦が行われるようになり、神奈川大会では権島先生に負けて上位に進めませんでした。61才で7段に昇段して令和7年で10年経過、8段審査の義務年限を満たすことになり（65才以上は5年での受験資格に令和7年より変更になりましたが）令和7年に8段審査を受験を目標に現在勤務地の鹿屋武道館での稽古で西久保8段の指導の下、審査受験を目標に姿見後ろからの見栄えする姿勢になっているか、立ち合いに関しては相手を引き出して打ちこんでいるかまず基本稽古より一緒に打ち込みから立ち合いまでの指導を受けながら同じ7段の稽古仲間と一緒に切磋琢磨しておりました。鹿児島での昇段審査の予備審査会にも参加2月の立ち合いの審査に関して範士の先生からの内容に関しての指導も受けながら打ち切る立ち合いの重要性を指摘されるなどの機会を学び、以前の稽古と比べて何かしらの変わったような自信を持つようになっていました。実際はわかりませんが。

今回の大会での審査形式が引き分けの場合審査員の先生方の勝負判定による決着となり立ち合いの内容が問われ、攻撃することが必要と考えて今までの稽古の結果を出すだけと肝に銘じて試合に臨んだ状況でした。自分の得意技は面だけしかありませんので思い切って打ち込むことだけを心掛けました。試合内容に関しては大会の資料を持ち合わせず詳しく内容を振り返ることが出来ませんが何試合か判定での決着となり判定が割れたことを記憶しております。学生時代の試合の時にゾーンに入って優勝したことをありますが同じようにそのような状況であったものと思います。

さてこの大会に参加したのは昭和63年9月の第23回米子大会からでした。当時西日本医科学学生大会で競った鳥取大学の現在島根の堀江先生や今は故人となった岡山大学の渡辺先生が出演していて一緒に年1回の親交を始めたのが楽しみでした。その後いろいろな場所での開催に参加して多くの先生方と昼間の稽古や懇親



会その後の二次会等にて交流を持つことが出来ました。昇段は遅くなりましたが、その分身体の衰えは少なく、もうしばらくは高齢者剣道大会などに出場し交剣できるだけでも幸せと考えて頑張っていきたいと考えております。今後ともよろしく願いいたします。



札幌大会団体戦優勝

北海道チーム

札幌大会を終えて

船越 匠



第58回全日本医師剣道大会札幌大会を無事に終えることができましたこと、まずもって関係各位に深く御礼申し上げます。本大会において北海道が主幹を務めさせていただきましたことは大変光栄であり、同時にその責務の重さを強く感じながら準備を進めてまいりました。大会の開催にあたり、多くの先生方ならびに関係者の皆様より多大なるご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

とりわけ、本大会の大会長をお務めいただきました池澤先生には終始温かいご指導を賜り、大会の円滑な運営に多大なるお力添えをいただきました。また、審判長として大会をお導きいただきました古川先生におかれましては、公平かつ厳正なるご判断のもと大会全体をお支えいただき、そのご尽力に深く敬意を表するとともに厚く御礼申し上げます。

本大会において北海道チームは団体戦優勝という望外の結果を収めることができ、私自身も次鋒として出場の機会をいただきました。全国より参集された先生方との対戦はいずれも真剣勝負であり、その一試合一試合が大変貴重な経験となりました。日頃なかなか剣を交えることのできない先生方と対戦させていただいたことは、剣道を続けてきた者としてこの上ない喜びであり、本大会の意義の大きさを改めて実感いたしました。個人成績としては四勝一分という結果を残すことができ、自身でも驚くほど調子の良い状態で試合に臨むことができました。これもひとえに、日頃よりご指導を賜っております古川先生、池澤先生のご教導の賜物であり、ここに改めて深く感謝申し上げます。

今大会は主幹を務める北海道チームとして臨む大会であり、優勝への期待と責任の大きさから、これまでにない緊張感の中での戦いとなりました。そのような状況において結果を残すことができたのは、出場した七名それぞれが役割を果たし、互いに支え合いながら一戦一戦を積み重ねることができた、まさにチームの結束の賜物であったと感じております。試合を重ねるごとにチー

ムとしてのまとまりが増し、全員で成長しながら勝ち上がることができたことは、何ものにも代え難い経験となりました。優勝が決まった瞬間、大会長として長く本大会を支えてこられた池澤先生が感涙されているお姿を拝見し、私自身も思わず涙をこらえることができませんでした。この優勝は北海道チームだけのものではなく、本大会に関わってくださったすべての先生方のお力添えの上に成り立つものであると強く感じております。

本大会のもう一つの楽しみでもある懇親会におきましても、多くの先生方と親しく交流させていただき、大変思い出深いひとときとなりました。「夜の団体戦」とも称されるこの席において、私と大学の後輩である毛糠が僭越ながら「日本酒剣道形」を披露させていただく機会を頂戴いたしました。諸先生方の温かいご声援のもと何とか務めることができ、まずまずのご好評をいただけたことから、夜の部門においても優勝をいただいたような心持ちで、大変嬉しく感じております。後日受審いたしました五段審査の際には、古川先生より「今日の形よりも、宴会のときの形の方が良かったよ」と笑顔でお声掛けをいただきました。そのお言葉に恐縮する一方で、思わず冷や汗が流れたことはここだけの秘密にさせていただきたいと思えます。

第59回全日本医師剣道大会は静岡の地での御開催となります。北海道チームといたしましても、今回の結果に慢心することなく、再び全国の先生方と剣を交える機会を楽しみにしながら日々の稽古に励んでおります。遠方ではございますが、次回大会にも何とか参加し再び良い結果をご報告できますようチーム一丸となって精進を重ねてまいりたいと存じます。



最後になりますが、本大会の開催にあたりご尽力いただきました大会関係者の皆様、ご参加いただいた全国の先生方、そして日頃よりご指導を賜っております諸先生方に、改めて心より御礼申し上げます。本大会で得られたご縁と経験を大切に、今後とも医師剣道の発展に微力ながら貢献できますよう努めてまいります。



9月稽古会

森 俊樹

2025年9月5日、横浜市の神奈川県立武道館剣道場において、全日本医師剣道連盟の稽古会を開催しました。当日は野見山会長をはじめ、八段の先生方5名（佐藤正二先生、小山則夫先生、石原和彦先生、有馬裕史先生、町本省先生）にご参加いただき、医師14名、助産師1名、家族2名、医学生2名が集い、活気あふれる稽古会となりました。

当日は午前中に関東地方を通過した台風の影響により、同時刻に予定されていた神奈川県剣道連盟主催の一般稽古会が急遽中止となりました。その情報を知らずに来館された一般剣道家13名の方々について、神奈川県剣道連盟副会長・佐藤正二先生のご提案により、当連盟の稽古会に受け入れることとなりました。



稽古の前半は、石原和彦教士八段のご指導のもと、素振りから基本稽古まで十分な時間をかけて行いました。切り返しでは大きく強い打突を意識し、基本打ちにおいては一足一刀の間合いから左足を継がない面打ちについて、丁寧なご指導をいただきました。神奈川県剣道連盟の合同稽古と比べても、基本を学び直すための充実した稽古時間を確保することができました。

後半は八段の先生方6名が元立ちとなり、指導稽古が行われました。また、医師剣道連盟会員同士の稽古に加え、神奈川県の一般剣道家との稽古に真摯に取り組む姿も多く見られました。

普段は医師を中心とした稽古会ですが、この日は多様な背景を持つ剣士も加わり、互いに良い刺激を受け合う貴重な機会となりました。台風の影響による思いがけない出会いが生んだ、印象深い稽古会となりました。



全日本医師剣道連盟合同稽古会（東京）レポート

東京都 萩原 幸彦



去る2025年11月24日(月・祝)の13:00～15:00にて東京都新宿区にあります東京医科大学記念館(体育館)1階で全日本医師剣道連盟の稽古会が開催されました。晴天に恵まれた東京の日中気温は17℃に達し風速は1.6mで少々汗ばむような天候のなか、北は北海道、そして西は愛知および三重から当連盟の会員約20名が集いました。稽古会には東京医大の学生たちも加わって総勢30名をこえる規模となりました。

まずは今回ご多忙の中ご指導を頂きました剣道八段の先生方をご紹介します。

・警視庁剣道指導室：坂田敏郎先生、
笹川一文先生、権瓶功泰先生、
矢吹裕二先生、松脇伸介先生

・全日本医師剣道連盟：野見山すすむ会長、池澤清豪先生

ご協力を頂きました総勢七名の先生方には心から御礼を申し上げる次第です。参加費無料でこのような錚々たる先生方のご指導を頂けるありがたさを覚える時、当連盟に加盟したのは本当に幸いであったと実感いたします。

そして実施された稽古会のタイムテーブルですが、下記に提示しました当初の予定に沿って進められました。

- (1) 12:30 (適宜) 会員相互稽古
- (2) 13:20 整列、礼
- (3) 13:20～13:50 剣道教室
- (4) 13:50～14:50 指導稽古
- (5) 14:55 整列、礼
- (6) 15:00 解散

(1) 会場の準備が整う前から剣道着に袴姿の人影が見え始め、本部からの許可が下りた後に三々五々稽古が開始されました。揃っての礼は予定されてお

りませんでしたので“適宜”と補足された通りの始まりです。そして今回も注目を集めたのは本連盟の名物となっております三重のN先生と大阪のS先生との長～い稽古でした。後期高齢者のN先生はその後も何名かの会員と稽古をされ、私はその最後のお相手を務めさせて頂きました。役員の方から「稽古止め。」が発せられ周囲の方々が稽古を終えた後もなかなか竹刀を納めて頂けず、S先生との稽古開始からずっと動き続けるN先生からは普段の充分以上の稽古量を肌で感ぜざるを得ませんでした。

(2) 会員整列し野見山連盟会長の簡便快活なご挨拶を頂き速やかに礼が行われました。

(3) 本題に入る前に警視庁剣道指導室の坂田敏郎先生の号令の下全員で準備体操を行いました。体操終了後そのまま坂田先生による剣道教室・指導基本稽古となり、剣道の基礎を見直し再点検するということから始まりました。当連盟会員の殆どの先生方は指導者の立場にあるかと思われませんが、本当に正しい指導を行っているかという自己再考のポイントをわかりやすくご説明してただけました。まずは基礎中の基礎である竹刀の握り方、なぜ左手の中指から小指までの3本で握るのか、その成り立ちと重要性の解説から始まりました。その後右手と左手の役割と用い方、構えた時の足での体重の載せ方、正しい中段の構え、すり足での体重移動方法など豊富なご教示を頂きました。なかでも警視流の素振り解説は、曖昧で抽象的になりやすい素振り指導を明確な説明によって一蹴する内容と拝聴いたしました。そして面をつけての打ち込み指導へと進みました。

(4) 打ち込み終了後にいよいよ八段の先生方の元立ち指導稽古です。会員が個々に八段の先生方からご指導を頂き熱気あふれる稽古が繰り広げられました。人数比から会員一人当たり4～5名の先生方からご指導をうけることが可能でしたが、それだけ八段の先生に続けてかかりますと自分の身が持たなくなってくることを体感いたしました。全体を通して学生の若い気合も耳に入って張りのある稽古会と感ぜられました。

(5) 開始時と同様に野見山会長の明快なお言葉で礼が行われました。

(6) 解散も宣言一括で速やかに行われましたが、希望者による居残り稽古も見受けられました。

今回は懇親会なしの稽古会でしたが、遠方よりご参加された先生方におかれましては旅費に見合う稽古をご経験されたのではと拝察いたします。

台湾との交流

友愛医療センター 整形外科 永山 盛隆



皆さま、こんにちは。

現在、沖縄県医師剣友会会長をさせて頂いている永山盛隆と申します。奥島憲彦先生から会長役を引き継ぎ、この度は全日本医師剣道連盟幹事も引き継ぐことになりました。

私が最初に全日本医師剣道大会に参加したのは1992年の第27回香川県大会で、会長が畠瀬修先生で大会事務局長を伊藤保憲先生がされていました。思い起こせばあれから34年も経ったのだと長い年月を感じてしまいます。

その4年後の1996年には第31回沖縄県大会を故永山薫先生（私とは親子関係はありません）が会長で私が事務局長として、当時新築出来たての県立武道館で開催させて頂きました。

そして2022年第55回大会にはコロナ禍で開催が延期となった時期ではありましたが、奥島憲彦先生を会長として2度目の沖縄県大会を成功裡に開催させて頂きました。そのときも私は事務局長を担当し、多くの方々に大変お世話人なった思い出があります。残念ながらコロナ禍の影響で海外からのご参加は遠慮させて頂きました。

しかし、お隣の台湾（中華民国）の先生方と交流をする機会を得ることが出来ました。

事の始まりは2023年4月の全日本医師剣道新潟大会で、はるばる台湾から参加された陳亮仁先生との出会いがきっかけです。その際に台湾と沖縄県で交流したいという話になりました（写真1）。



写真1

当県は台湾にとっては沖縄というよりも琉球のイメージが強いようで、琉球文化をこよなく愛し、自ら三線も引きながら琉球民謡が歌える親日（親琉球？）の剣道4段を持つ家庭医学医で、日本語もとても堪能で沖縄県民にとってその熱い情熱から台湾と沖縄の強い縁を感じます。実は戦時中は沖縄から台湾へ1万人以上が疎開されていた経緯があり、私の父家族も含まれていました。県民の4人に1人が命を落とした激戦の沖縄戦だけに、台湾疎開がなければ今の私は存在してなかったかもしれません。

そして2024年11月29日～12月1日の日程で台湾での沖縄医師剣友会と台湾医師剣友会の交流稽古会が開催されました。

遠征メンバーは奥島憲彦先生とそのご家族、当院外科後期研修医と奥様、国体選手の高校後輩と私夫婦の計8名。

旅行の主旨は観光を基本とし、私達の体力に合わせて無理のない稽古会とさせて頂きました。

到着した日の台北桃園国際空港では2人の先生方が迎えに来られ、親切にも1人目の謝先生が車で防具や荷物をホテルまで運んで下さり、もう1人の江先生が我々と一緒に電車MRTに乗ってホテルまで案内して下さいました。

到着日は夕方から有名な九份に行きました。映画「千と千尋の神隠し」を想像するような赤ちょうちんが数多く飾られた幻想的な街並みと夜店を堪能しました（写真2）。その後、台北市に戻り夜市に繰り出し、海外観光客の多い中楽しい台湾の熱気を感じました。



写真2

2日目は朝から観光ツアーに便乗し、パワースポットの龍山寺、ウーロン茶の専門店、小籠包の名店での昼食、蒋介石記念堂、故宮博物館、衛兵たちの一糸乱れぬ行進と交替の儀式のある忠烈祠など充実した観光ができました。

夕方から稽古会の予定があり、台湾の先生方に迎えられ道場に案内されましたが、医師は11人参加されていました。伝統ある修道館という道場はビルディングの7階にあり、そこは1970年第一回世界大会で準優勝した台湾チームのメンバーだった謝先生（医師）が造られたとのことでした。また、道場の指導者の一人は世界大会の台湾チームの代表にまでなったこともあるそうです（写真3）。



写真3

歴史ある道場で、これまでも日本から多くの剣道団体が稽古会に来られているとのことで、数多くの記念写真を見せて頂きました（写真4）。



写真4

医師以外に修道館のメンバーも加わり3分間区切りの廻り稽古を10名ほど行いましたが、皆さん、元気よく真っすぐな剣道をされて大変気持ちよく稽古ができました（写真5）。その後、道場をあげて有名な海鮮料理店で歓迎会をしてもらいました。道場の林範士8段と指導者の張先生もおられ、台湾の誇るカバラウイスキーを飲みながら皆、ジェスチャー、英語、日本語を総動員して交流しました。皆さん、大変気さくな方ばかりであっという間のひと時を過ごすことができました（写真6）。



20241130 沖縄医師剣道会 訪館留念

写真5



写真6

翌2025年11月14～16日は台湾の先生方を沖縄にお招きしました。沖縄県剣道連盟のご協力も得て、県立武道館での合同稽古会を行うことができました（写真7）。夕方は琉球料理と沖縄民謡を堪能して頂き、最後はキャーシーで締めて「好剣知愛」の友好を深めました（写真8）。そして翌日は沖縄観光も楽しんでもらい無事帰国して頂きました。



写真7



写真8

今年は再度、11月頃にこちらから陳先生の故郷にお邪魔する計画をしておりますが、静岡での第58回全日本医師剣道大会でもまたお会いできることを楽しみにしています。

沖縄県医師剣友会は各自の自主稽古の他に、県立武道館で毎月日曜祝祭日の1日を基本稽古会にあてております。参加者は数名程度のことが多いのですが、メンバーの繋がりを維持しながら地道に継続しております。

私事ですが、新型コロナウイルス感染以降その後遺症なのかいつの間にか肺活量が標準レベルを下回ってしまい、狭心症も思いステント留置・風船治療も受けながら知らない内に体力の衰えを感じております。自分の専門領域である整形外科分野でも、体中のあちこちにガタがきて四苦八苦しています。ご高齢でありながらも尚、お元気で稽古をされておられる先輩諸氏のパワーには今更ながらに敬意を表しております。

それでも老化は避けられない運命だと割り切り、その都度メンテナンスを行いながら先輩諸氏に少しでもついて行けるよう体の続く限り切磋琢磨し、毎年の全日本医師剣道大会へ楽しく参加し続けたいと思っております。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

幹事退任挨拶

全日本医師剣道連盟の幹事を退任するにあたって

沖縄県 奥島 憲彦

沖縄県の奥島です。実は2年ほど前に中等度から高度の心不全と診断され、主治医からは「運動は散歩程度にしてくださいね?」と言われもう剣道はできないのかとガッカリしました。また、前立腺の疾患も患い1年間は全く防具をつけた稽古ができませんでした。そこで第58回全日本医師剣道大会 in 札幌の幹事会で野見山延会長にお願いして幹事を退任させていただいた次第です。

主治医の厳格な血圧コントロールなど内服治療が奏効してきて週1回30分程度の防具をつけた基本稽古ができるようになり、不安をかかえながらも池澤清豪会長の第58回大会に参加することができました。

私自身は千葉で行われた第20回大会に初めて参加しました。以後も可能な限り本大会に参加し、多くの先生方にご指導いただき、ここまで育てていただきました。先生方や全日本剣道大会には心から感謝申し上げます。今後も一会員として、稽古が継続できる限りは全日本医師剣道大会には参加するつもりですので「交剣知愛」をどうぞよろしくお願いいたします。



昭和の月光仮面と仮面ライダー —「性善説」と「性悪説」—

札幌 池澤 清豪

昭和の30年代は月光仮面、50年代は仮面ライダーどちらもテレビで放映され、子供たちに絶大なる人気を得た作品である。

小さい頃「どんな人になりたい？」と聞かれると「月光仮面！」と答えた記憶がある。

月光仮面は1958年（昭和33年）に放映され、1年5カ月続いた。私（1953年・昭和28年生まれ）は5歳だった。月光仮面はお兄さんでなく“おじさん”で、白いターバンの上に三日月、顔は覆面とサングラス、ましてや乗っているバイクは市販品。今なら怪しい悪者のおじさんである。「戸どこの誰だが知らないが……月光仮面のおじさんは正義の味方だ…颯のように現れて…月光仮面は誰でしょう戸」当時の子供は皆、月光仮面に憧れ、お面をつけて、風呂敷を首に回し、小さな棒を鉄砲がわりに腰にぶら下げ、飛び回り、月光仮面ごっこしたものだ。飛び回る仲間も皆、月光仮面であり、悪者になる奴は誰一人いなかった。



わが息子（1983年・昭和58年生まれ）は、5歳のころ「仮面ライダー」になりたいと言っていた。仮面ライダーのヘルメット、ベルトをつけ、「変身！」を繰り返していた。必殺技は「ライダーキック」「ライダーパンチ」であった。「戸迫るショッカー地獄の軍団～世界の平和を守るためゴゴレッツゴ～ライダージャンプ ライダーキック～戸」このときも誰一人ショッカーになる

悪者はなく、「変身」の言葉とともに、ジェスチャーをし、ライダーキックを父親である私や犬にむかい飛びかかっていた。

仮面ライダーは1971年昭和46年に放映され、何度か中断はあったが、今も続いている凄い人気である。東映が石ノ森章太郎先生の健在の頃の作品を昭和ライダー、石ノ森章太郎先生が亡くなった後からの作品を平成ライダーと正式に決めていることも加えておく。

仮面ライダーは人間以上の能力を持った戦士であり、昭和では肉体の一部に機械を入れ込んだ改造人間であり、平成では放送の倫理上から、この設定は用いず、超越的な力による肉体変異や高度な技術による武装によって変身している。

ブームに火をつけたのは「変身」である。変身ベルトは子供にとって必需品となった。

私も子供のクリスマスプレゼントとしてあげた記憶がある。

共通点は悪人と戦うことだが、月光仮面は悪人を懲らしめるだけで過剰には傷つけることはなかった。それは大人になって知ったが、月光仮面のモチーフは、薬師如来の右脇侍を務める月光菩薩で、月の光のようなやさしい慈しみの心で煩惱を消すのである。

人を助け、悪を懲らしめるが、殺したりせず、諭して赦すのである。これは仏教の教えに通じるものである。ターバンの前面には三日月のシンボルを飾っているが、これは月の満ち欠けを人の心になぞらえ、「今は欠けて（不完全）いても、やがて満ちる（完全体）ことを願う」という理想、「月光は善人のみでなく、悪人もも遍く照らす（月光菩薩）」との意味が込められていたようだ。深い演出である。

残虐な戦争（太平洋戦争）を経験し、その13年後の月光仮面の出現であったが、当時、人々には慈悲の心が重要視されていたことを改めて知った。このように人の心に“善”が内在している世界で昭和の人は育ち、協同社会の構成員としての役割を持って生活していたのである。

「性善説」とは、孟子が唱えた説で、人間は生まれながらに善なる本性を持っているという思想である。善の心を持っているので、努力を惜しまなければ立派な人間になることができると訴えた。なぜなら人間は誰でも道徳感情である「四端の心」を本来的に備わっている。四端とは四つの兆しという意味で、惻隱（可哀そうな場面を見ていたたまれなく思う心）羞惡（不正や悪を憎む心）辞讓（他人に譲ってへりくだる心）是非（正しいことと間違っていることを判断する能力）がある。さらにはこの四端の心を教育などでどんどん伸ば

すことにより、どんな人間でも善人になれる。このように、誰でも「聖人」と呼ばれるような偉大な人物になりえる可能性が備わっているのです、それゆえ教育が大切と孟子は主張したのである。

それを証明するがごとく月光仮面は、悪い人にいじめられる人を見ると惻隱の心（人の不幸を放っておけない心）から助けに行き、悪者には羞惡（自分のした悪い行動を恥じる心）を教え、辞讓心（お互いに譲り合える心）として仲良くし、見ている者に是非の心（善悪を見分けることが出来る心）の四端の心を教えていたのである。

つまり、復讐などの戦いは何も生まれないのだから、悪人と戦っても殺すことなく、悪人を許してあげよう、と。そこで悪人に対して、人としての正しい方向に変わるチャンスを与えたのである。

大きな戦争が終わったばかりの時代であるがゆえに考え深い。

一方、仮面ライダーは悪の秘密結社ショッカーによって無理やり改造手術を施されてバットの能力をもった改造人間になったのだ。しかし、悪の洗脳を受ける前に、人の心を取り戻し、人間の自由と世界の平和を守るため、正義として人のために戦っていきっていくのである。愛車であるバイク（サイクロン号）に乗り、毎週ショッカーが送り込む恐ろしい怪人達と戦う物語が展開された。従って、殺し合いとなる。

しかし、仮面ライダーは「性善説」というより「性悪説」で成り立っているようにみえる。仮面ライダーはこのように悪のショッカーによって改造人間され悪の手先になりかけた。それゆえ人間ではなくなったが、人間の本来もっている純粋な綺麗な心を取り戻し、正義に向かって生きていくのです。

「性悪説」とは「性善説」に反して荀子が唱えた、人間の本性は欲望に弱いが、後天的な教育や努力により、公共的な善を知り礼儀や考え方を正せるという教えである。つまり努力次第で善になれるということだ。仮面ライダーも悪の改造人間に完全になり切る前に人としての正しく美しい心である良心を取り戻せたのである。

まとめると「性善説」の場合、スタートは（善）であり、努力することにより、より高い（善）を目指すことがゴールとなる。例えば、人の見てないところで皆さんの靴を揃えたり、電車で老人に席を譲ったりすることで、人間関係が円満になる。但し、他人の良い面だけを見て信頼する傾向があり、今の時代の詐欺事件に巻き込まれやすい。

反対に、「性悪説」の場合、スタートは（悪）であり、努力することにより、

(善)を目指していくことをゴールとすることである。例えばよく寝坊して遅刻をしていたが、早寝して遅刻をなくすことで、自立心が養われていく。仮面ライダーも真の善人間となるべくショッカーと戦っているのである。但し、他人は悪だという考えから、人に騙されることは少ないと思うが、独立独歩で、周囲に心が許せる者がいなくなることも考えられる。

要は、「性善説」「性悪説」それぞれ良い面ばかりではなく、裏を返せば悪い面もあるということである。

両者に共通するのは、人の可能性を信じ、“人がより素晴らしい存在になるには、どうすれば良いか？”という問いから始まり、どれだけ今より努力するかが大切かってことになる。その軸となすのが教育の学びの重要性である。

月光仮面も仮面ライダーも悪者の戦いなが正義を子供たちに訴えている。時代に関係なく、その根底には観ている者の心に正義があるからだと思う。また、人間は助け合いによって困っている人を手助けすることが大切であると感じるかもしれない。

今の世の中、闇バイト、詐欺など人を傷つける事件が多いが、彼らだって幼い頃きっと月光仮面、仮面ライダーに憧れたに違いない。一度は汚れてしまっても、失ってしまっても、いつでも人の綺麗な心は取り戻せるぞと言いたい。

因みに宗教の立場で見ると、仏教はどちらかというとな性善説であり、人は本来、皆いい人なので、悪い人も同じように成仏できるのである。キリスト教は性悪説で、人間はそのままにしておけば、人間の尊厳を失うほど墮落するのは簡単である。がゆえに、信仰することで、あるいはその人の持つ特性により、人間を超えた偉大な存在になると教えているのである。

昭和の月光仮面、仮面ライダーは1人孤軍奮闘で戦った。しかし、平成になり仮面ライダーは沢山のライダーが登場し、昭和の一人のライダーのような特別感はなくなった。このように仲間と一緒に敵と戦う、皆で支え合って戦うというスタイルになった。ある目的達成のため作為的に形成した集団、つまり利益社会の構成員である。これもどうすれば各ライダーはパフォーマンスを最大化できるかという性悪説が基盤である。沢山の個性的なライダーを観て、今の子どもたちは応援するのである。

平成に入り、スポーツにおいても団体競技の方に行く子が多くなったような気がすると感じているのは私だけだろうか？仮面ライダーの影響大である。

■月光仮面のキメ台詞

「憎むな、殺すな、赦ゆるしましょう」

■仮面ライダーのキメ台詞

「たとえ弱かったり、運が悪かったり、何も知らないとしても、それは何もやらないことの言い訳にならない」

「男の仕事の8割は決断だ。そこから先はおまけみたいなもんだ」

今もって正義とはかけ離れた邪念が強すぎて、憧れていたヒーローにはなれなかったが、困っている人がいたら助ける心は今も健在だ。あの頃の信じた道を、もう一度見直し歩いてみようかな。もう遅いか。

性善説を信じ薄野に通い続ける男より



古希を迎えるにあたり剣道をおもう

全日本医師剣道連盟 副会長 林 明人（つくば市）



私は今年の12月で70歳となり古希を迎えます。高齢者の真っ只中ではありますが、70歳という年齢は何か新たな響きがあると昨年末から感じています。

古希という言葉は、唐の詩人である杜甫の詩の一節「人生七十古来稀なり」という言葉に由来しています。70年生きる人は古くから稀である」という意味です。

孔子曰く、『七十にして矩をこえず』。74歳まで生きた孔子は論語でその人生観の一節として、晩年の境地として70歳になると自身の心の欲する所に従って行動しても道徳の規範から外れなくなると語っています。長年の経験により自身の欲望と社会のルールが自然と調和する境地に達することを指しています。このことから、70歳は『従心（じゅうしん）』とも呼ばれています。

さて、自分の70歳はどうであろうか？

人生100年時代とも言われる今の時代では『古希』は稀ではなくなりました。

孔子の晩年の境地とされる『従心』には無論遠く及びません。一方で、ラッキーカラーが還暦の赤から古希の紫となり、何か新たな響きを昨年末から確かに感じています。

私と同世代の桑田佳祐さんも今年古希を迎えられ、あるキャッチコピーを掲げておられます。曰く、『NEW 70'S ここからが始まりでしょ！』まさしくこのフレーズは今の自分に当てはまるとても共感できる言霊だと思いました。

古希の私にはこれまで歩んできた医学の道と剣道があります。剣道に私の人生を豊かにしてもらっていることを日々実感しています。古希を迎えるにあたり、これが生涯剣道の新たな始まりであり、これからが新たな挑戦です。

昨年高齢者の昇段までの期間が変更となりました。一昨年5月に67歳にて七段となり従来通りなら次の昇段審査まであと8年の77歳まで待たなければならなかったのですが、65歳以上の昇段への期間が半分になり、次の昇段審査まであと3年の72歳となりました。もうあまり時間がなく受審までまもないと実感しています。これまで自分の稽古などの動画はあまりみていませんでした。理

由は自分の姿がツッコミどころ満載で、筑波山の四六のガマの気分になってしまい、自身の姿に耐えられずじっくりとみられないと感ずることがありました。古希を迎えるにあたり、このままではよくない、自身の反省点を一つ一つしっかりと正面から向き合っていこう、NEW 70'S ここからが始まり、動画などを用いて自分を見直したいと考えるようになりました。

見直す点は山ほどあります。着装、礼法はどうか？竹刀保持はどうか？気構え、身構えはどうか？思いつくままに具体的なことを少しあげますと、左手の親指の外側が臍の一こぶし前に納めているか？左踵をあと1センチあげて湧泉を意識して左脚で攻めているか？背筋、仙骨を意識して攻めの姿勢で向き合っているか？不離五行で相手と向き合っているか？左足での攻め、捌きはできているか？目付けはどうか？充実した氣勢から発声しているか？呼吸法はどうか？一拍子の捨て切った打ちを出せているか？鶴鴿の尾の構えで足を使っの剣の動きで相手と会話しているか？三位の格、露の位、石火の位、梵鐘の位はどうか？手打ちとならない冴えのある打突で1本となる打ちを出せているか？有効打突とならなくても無駄打ちとならない打ちであったか？遠間からの攻めができているか？打つべき機会を捉えていたか？打ってからの残心、縁を切らない次の攻めに繋げているか？技前の仕事をしているか？後の先を意識した攻めができているか？などなど。自身の動画をみて情けなくなることだらけではありますが、そこから逃げずにしっかりと課題と向かい合い次に活かすようにしていきたいと思っています。

詳細に動画などもみて反省点をしっかりと把握して、一つ一つ改善してこれまでの自身の剣道から前進していくことが私の70代からの始まりです。

多くの医師剣道の先輩、同輩、後輩の先生方にご指導を仰ぎながら、自身の剣道を見つめ直していき、古希からの新たなるリスタートとしたいと思ひます。今後とも何卒よろしくお願ひします。

以下に、昨年の6月以降に撮影していただいた写真をいくつかご紹介させていただきます。



名古屋に1泊して私の敬愛する東良美範士のご指導を受けました。感謝。

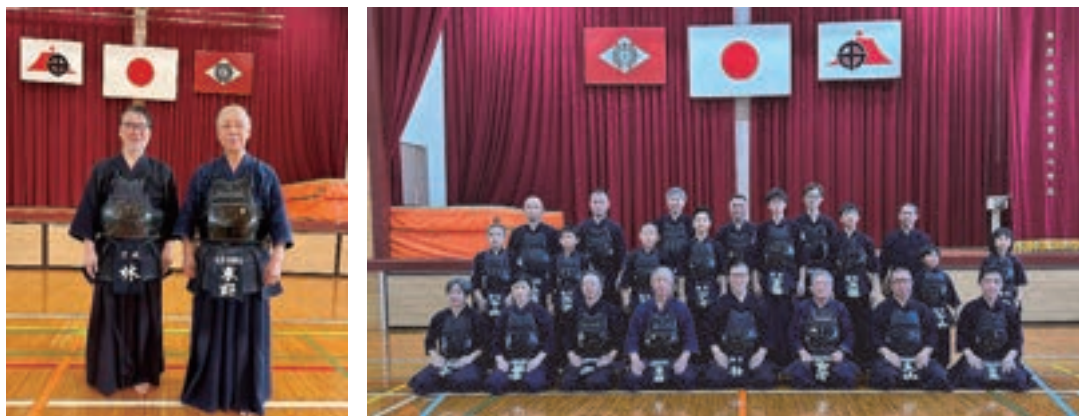


順天堂大学の三部大将で出場、昨年につき3位。団体戦の醍醐味を味わいました。

週2回水田重則範士に基本打ち、日本剣道形、地稽古のご指導を頂いています。水田先生と懇意の豊村東盛範士にも時々ご指導をいただいております。



香田郡秀範士にはお時間のある時にお声かけいただきご指導いただいています。



鹿児島県の末野栄二範士に星子啓太選手も通っていた道場にてご指導いただきました。



石田利也範士、宮崎正裕範士をはじめ、素晴らしい講師陣の強化合宿でのご指導を拝見できました。

多くの皆さまのご指導に深く感謝するとともに、古希を迎えるにあたり、70歳ここからが新たな始まり！の覚悟のもと、自身の剣道を成長させるべく精進いたします。

『昇段審査前後とこれから』

大西 司



剣道は21歳から初めて細々と継続しました。たくさんの方にお世話になりましたが昭和大学剣道部での稽古、そして野間道場での朝稽古が大きな礎となりました。野間道場で特にお世話になったのは、道好会会長の鏑木武盛先生でした。毎朝、真剣にかかりましたが、心の動きがわかるのか一度も打ち込めたことがありませんでした。大学の卒業式の時に初めて先生の正面に打ち込むことができました。上京した母が撮った写真が残っています（写真1）

卒業後、地元の小学生になった子供二人と一緒に杉並区の和泉剣友会（西岡輝幸先生）に所属し基本から学び直しました。

5段は苦勞しましたが、6段は初回で合格しました。2023年の冬、杉並区の大会で剣道形の演武参加を勧められました。足趾の冷感など体調が思わしくなかったのですが、足袋を履いて練習を行っていくことになりました。体調のことは宮坂信之先生にもご相談しました。剣道型では仕太刀を努めることになり、打太刀を努められる7段の先輩と下高井戸の岡田守正先生の道場に通い学び、また10回ほど自主練習もしました。合気になること、二人で何かを表現することを指導され稽古に励みました。

学生の頃、居合を教えていただいたこともあり（檀崎友彰先生）抜刀、納刀は慣れていたので助かりました。練習の時に意識したのは医学の恩師中島宏昭先生の義父稲村孝之助範士にご教授いただいた法定の『運歩』です。そして丹田からの気合いでした。家内の日本舞踊の先生に東京衣装（代々木上原）をご紹介いただき、本番で着る羽織に向かい雁の紋を付けました。演武当日は不十分なところもありましたが、気合いを入れて本当に真剣に演武をしました。

体調は少しずつ回復して、7段審査を目標に、地元の稽古、野間道場の朝稽



写真1

古に加えて、岡田守正先生の尚道館道場に週一回通いました。厳しい稽古でしたが、8段を目指されている方もいて真剣味と溜め、合気について学ぶことができました。

審査は名古屋、長野、名古屋の順で三回目の名古屋で合格しました。直前に京都武徳殿で女子世界選手権強化合宿に帯同して特別な雰囲気の中で見取り稽古をさせて頂きました。審査の相手が女性とわかり戸惑いましたが、一緒に受審された林 明人先生に、いつもと同様に普通にやれば良いと言われ、気負いなく立ち会うことができました。相手の方は全日本選手権に出られた息子さんと一緒に剣道を始められたようで、とてもいい剣道をされていました(写真2)。審査後、山梨の下吉田で開かれる教会の慰霊祭に参列するため新幹線を三島で降り富士山駅行きのバスに乗り込みました。富士山の東面の姿が美しく感じました(写真3、4)。



写真2：防具専用のスーツケース『隼』、なぜか二人とも持っていました。

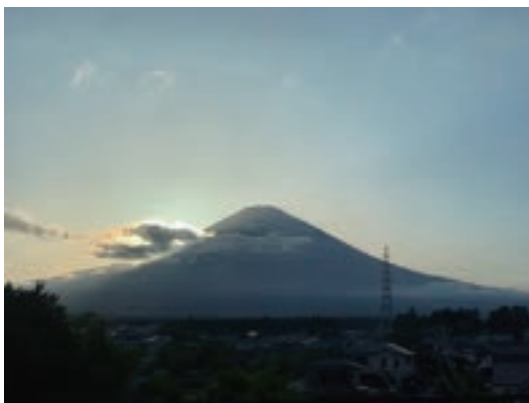


写真3：三島から富士山駅への車中から見た夕方の富士山です。

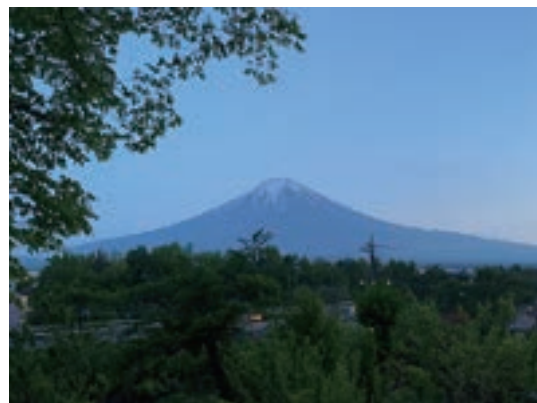


写真4：慰霊祭が行われる富士吉田からの富士山です。

審査後の稽古は、野間道場の先生にじっくりと溜めて打ち切るように言われました。少しずつですが稽古が変わってきたかもしれません。一昨年先輩の清水浩二先生から勧められ関東学生連合会の3部シニアに先鋒で出場しました。三回戦で一本、会心の面を打つことができました。結果はベスト8と善戦しました。

昨年は初めて地元の剣友三人で京都大会に出場しました（写真5）。伝統の



写真5：地元道場の剣友三人で参加しました。

ある武徳殿で立会いができたことは光栄であるとともに、朝稽古や高段者の立ち合い稽古を拝見することができ勉強になりました。今年もチャレンジしてみようと思います。

昨年6月の北海道大会は楽しみにしていたのですが、直前の6月1日朝稽古で互いの面を打ちすり抜ける時に左足薬指を骨折し、職場近くの先輩に見ていただきました。職場でやっていた週三回の木刀の素振りとは形はつづけました。昨年10月勉強会を兼ねて米国ミネソタ州ロチェスターを訪ねました。35年前に家内と梶谷道夫先生と始めた剣道クラブを訪ね、竹刀を交えました（写真6）。

海外の方は稽古の機会を大切にするととても熱心です。梶谷先生を通して来日した剣士は10人近くいます。米国の友人に聞くと剣道を始めて長く続ける人は40%くらいだそうです。日本の実情に比べてその熱心さに驚きました。

最近は職場でも小さな子供を持つ母親に習い事を聞かれると剣道を勧めます。医師会でも昔、剣道の経験がある人には誘ってみます。健診に来られる剣



写真6：次男が指導、代表のボス先生の奥さんが日本人で通訳
してくださいました。

道経験者の方にも勧めるようになりました。過ぎないようにしようと思いますが、剣道は心より勧めたいと思います。

先日、96歳になった母に剣道のことを聞かれ7段になったことを話すと『次はいつなんや』と聞かれました。少し考えて『3年後や』と話した。その時まで無事これ名馬でゆっくり剣道を続けたいと思っています。

大切にしたいことは“武”の意味は矛を止めるということですので、平和のため、そして“交剣知愛”、国を越えて竹刀を交えることができればと思います。

令和8年2月24日
大西 司

初心忘れることできず

長崎県 牟田 幹久



私が剣道を始めたのは小学2年生の冬。今年で齢67歳。60間年も剣道を続けてきたこととなります。

剣道を始めたきっかけは、父が長崎県大村市の地で開業するにあたり、町内会長さんに挨拶に行ったところ、「町内の公民館で剣道教室を行っているので、子供さんも一緒にどうか」と声をかけられたことから始まります。その頃の私は剣道なんて全く知りませんでした。後で知った事ですが、父は幼少期に少し剣道を習ったことがあり、子供に剣道をさせたかったらしく、私の意思を確認することなく、その場で了承し、すぐに道場に連れていかれたのが運の尽きでした。60年間の間、決して剣道に真

面目に取り組んだわけでもなく、途中で何度も止めようとも思ったし、現に医師になり10年近くは仕事にかまけて竹刀を握らない時もありました。でも、結局剣道に戻ってきたのは、自身の心と体の中に剣道が染みついてしまっていたためだと思います。生涯剣道とは言え、元気で剣道が続けることができるのかあとどれくらいあるのか？体と頭がまだ動くうちに自身の剣道に対する考えを纏めてみたくなり、ここに拙い文章を書いて投稿してみます。事務局から依頼されたわけでないし、下手くそな剣道愛好者の戯言と笑いお読みください。

私が最初に剣道の手ほどきを受けたのは立花助春先生という自衛隊勤務の先生でした。私の住む大村市は自衛隊の町で、自衛隊に勤務する剣道愛好家が市内の公民館で子供たちに剣道を教えていました。元々、大村の地は幕末に大村藩が江戸三大道場の一つ、錬兵館から斎藤弥九郎の三男斎藤歎之助を招き剣術を推奨した地であり、剣道が盛んな場所でした。その流れもあり、当時人口5万人強の地で少年剣道を習う子供たちは1500人程いました。

立花先生は、背が高く面打ちを得意とする方で、子どもたちには「一足一刀の間から相手より先に面を打ちなさい。絶対に下がってはいけません。」と教えておられました（私の記憶では）。小学校を上がった後は、私は中学、高

校、大学と剣道の師に就くことなく、部活動の中で先輩や同輩とただひたすら試合に勝つためだけの剣道を自己流で続けてきました。ですので、私の剣道はただ力とスピードに頼る剣道であり、そこには理合いがなく、試合は勝つ時はスパーッと勝つし、負ける時はアッという間に負ける、良く言えば外連味の無い豪快な、悪く言えばただ元気の良いスポーツ剣道です。私自身もずっとそれが剣道と思って続けてきましたし、稽古が終わる時は、汗だくになりへべレケにならないと気がすみませんでした。

ですので、年齢が上がり高段位になるにつれて思うように剣道ができなくなり、そこに昇段の壁が立ちふさがりました。そこで、理合い、風格、品位を身に着けたく居合を習うことにしました。

剣道七段の壁にぶち当たっている時、八段の先生に「先生はお相手の事を考えていますか？竹刀を通じて話していますか？」とご指導いただきました。ただスピードと力の剣道に頼る私には何のことか全くわかりませんでした。居合を学ぶ中で、「早く刀を抜くこと」ではなく、「相手の動きを見てから素早く抜きつけること」、さらには「自分の気で相手を制し、刀を抜かせないまま引き分けに持ち込むこと」が究極の極意だと知ったとき、八段の先生の言葉が次第に心に響いてきました。

私は、自己中心でわがままな人間です。医療においても、医師として患者の話の聞かず、自分が正しいと思うことを押し付けるだけでした。それでは患者との信頼関係など築けるはずもなく、治療が上手くいくはずありません。剣道、居合を通じて相手の心と話す事の重要さに気づいてからは、できるだけ、患者の話に傾聴し、腹を立てる事なく、患者の心に共感し、納得を得られる医療を心がけるようにしました。また、そうすることで、剣道でも慌てる事なく余裕を持って構え、遠山の目付をもって相手と会話ができるようになった気がします。七段審査に合格し医師としても成長できたのはこのご指導のおかげと感謝しています。

今、高齢者になった私が目指す剣道は、稽古の後に汗をかかない、息が切れない、筋肉や関節が痛くならない剣道です。動かない、遠間から打たない、引き出されないことが肝心であり、そのためには、触刀の間から氣勢を充実させて間合いを詰めて、一足一刀の間に入ったら攻めてこられても動くことなく氣勢で相手を抑え、相手が苦しくなって動こうとした瞬間をとらえて技をだす。こんな技が、稽古の中で一本も打てるようになればとおもっています。

実は、これは、剣道を始めた時に教わった立花先生の教えそのものだと思います。60年間、「遠くからただ速く打つ」と自分が間違っ理解していた最初の教え。でも、それを忘れずに続けてきたことが今の自分の剣道を作っていると改めて思います。もっと早く正しくこのことを理解していたら八段昇段も夢

でなかったかもしれませんが、今となっては、細く長く剣道を続けて理想とする技が出せるようになれたらと思っています。

全日本医師剣道大会は私が剣道を続けていく心の糧です。剣道を再開した時、熊本で開催された大会に初めて参加しました。そこで会ったのが、学生時代のライバル（と私は勝手に思っていますが、実力は雲泥の差）の熊大の甲斐君でした。それ以外にも、大会を通じて憧れのスーパースター熊大の諸木さん、鳥大の堀江さん、名大の永山さん等でした。学生時代接触はなくても、青春の1ページを共有し、そして医師として剣道を続ける仲間がいることは人生の励みです。年々気力体力は衰えていきますが、年に1度皆さんと再会できることが何よりの楽しみです。これからも大会へは参加していきますので、稽古をお願いします。そして、その時に、理想とする一本を出すことができればこの上ない励みとなります。

長くなりましたが、最後にもう一つだけ、剣道を始めた頃のことを書かせてください。

私が入った道場では、剣道の稽古の後、「剣道五訓」という道場訓を大声で唱えていました。

- 一、私は、礼儀を正しく嘘を言わない人間になります。
- 一、私は、剣道に励み強い体と心をつくります。
- 一、私は、多くの人のためになる正しい人間になります。
- 一、私は、健康であることを父母に感謝し勉強に励みます。
- 一、私は、兄弟助け合い友達と仲良くします。

今人生を振り返ると、これは私の人生訓となっています。幼少の頃、心に刻みこまれたことはなかなか忘れることができないものですね。

剣道六段合格体験記

谷上 博信



大阪府医師剣連の谷上博信です。2025年11月に名古屋の審査会にて65歳で六段に合格しました。小生は青年・中年期に剣道歴がなく、27年の中断の後、53歳・二段で剣道を再開した所謂「リバイバル剣士」です。今回合格体験記をというお話をいただきましたが、六段審査の立ち会いについては「必死に面を打った」ということ以外は記憶になく、あまり参考にはならないかと存じます。そのため大変恐縮ですが、リバイバル剣士としての今までの拙い剣道経験を記して皆様のお目汚しとさせていただきたいと存じます。

小生は高校時代に剣道を始め、大阪大学時代は武専出身の故池田勇治範士と東京教育大出身の故杉江正敏先生にご指導いただきました。竹刀の握りを手を添えて教えていただいた池田範士の手の温もりは今でも覚えています。池田範士には日本剣道形も熱心に示演していただきました。

当時の阪大剣道部（全学）は、成地勉主将（現八段）をはじめ先輩方も実力者揃いで、切り返しや掛かり稽古を中心にコッテリと「可愛がって」いただいたのは良い思い出です（笑）。しかし、試合の駆け引きや細かい技のテクニク等を教わったことはなく、阪大も自分も試合で結果を出すことは出来ませんでした。

大学卒業後は、麻酔科医として臨床業務に従事し、多忙を言い訳に竹刀に触れることがないまま、いつしか50歳を超えていました。その一方で、高校時代の同級生で大学は違えど同じく医師になった倉都滋之君は、剣道を中断することなく今では八段に挑戦中で、同様に森能史君も40代で再開し七段を視野に入れています。両君の度重なる熱心な誘いと、心身のストレス解消目的に何か運動をと考えた際に新しいことを始めるより「昔取った杵柄」で剣道が良いと考えたという不純な動機から、小生も剣道を再開した次第です。

稽古先は勤務先近くの大阪修道館で、学生時代の恩師の杉江先生をはじめ、

故小久保昇治範士などのご指導を受けました。

剣道を再開した当初はすぐに足を痛めることを繰り返していました。今思えば、自分の記憶にある10代・20代の足腰にバネのある時期の剣道を50代の体にしていただけだと考えます。リバイバル剣士が陥る落とし穴かもしれません。

再開時の初稽古は、今でもよく覚えています。学生時代のままの垂れネーム（大阪大学 谷上）を付けて修道館に出向きました。最初の切り返しや基本の面打ち等は何の違和感も無く出来ました。ブランクが長くとも普通に剣道ができていたことに、学生時代の恩師や先輩方の指導に心から感謝していました。

ところが互角稽古になって、（垂れネームで学生だと勘違いされて）大学生のグループに入り、何故か強豪の大阪体育大学の学生とばかり稽古する羽目になりました。面を着けているので当方が50代のオッサンとは気づいて貰えず阪大生と誤解されたまま、筋骨ムキムキの体育大生から面打ちや突き、体当たりでボッコボコにされました。「僕は学生じゃないんだよ～～！、今日は27年ぶりの剣道なんだよ～～！、君たちのご両親より僕は年上なんだよ～～！」という小生の「泣き」の入った心の声は、相手に全く届かなかったのはいうまでもありません（泣）。

リバイバル剣士への衷心からのアドバイスとして、「剣道再開時には昔（学生時代）の垂れネームのまま道場には行かない」ことを記しておきます（笑）。

とはいえ、初回の稽古で自分の課題がよくわかりました。頭の中のイメージと体が全く合っていない、特に足が動いていない、ということで、道場に行かない日には、意識してスクワットや縄跳び、階段昇降等で足腰を重点的に鍛えることにしました。この習慣はその後コロナ禍でほとんど道場に行けなかった時にも実践して、そのおかげでしょうか、ご承知のように昇段審査では同年代の剣士と立ち会うのですが、自分ではお相手以上に動いていた気がしています。

しかしながら、この十数年、少しのことで体を痛めてしまい、しばらく道場に行けなくなる、という経験を繰り返して、自分がもう無理の効かない年代であることも痛感しました。学生時代に実践したような酷暑の暑中稽古や厳寒の寒稽古、あるいは上級者に繰り返し掛かり稽古を願うことで自分の殻を破って上達する、というような「王道」の剣道修行を否定はしませんが、我々高齢者には無理があるような気がしています。特に昨今の酷暑は異常で、盛夏に空調のない道場で剣道をするのは高齢者には無謀ですらあると感じています。

今は、たとえ牛歩の歩みであっても「怪我せず長く剣道を続ける」ことが高齢者剣道家にとって一番大切であると考えます。

また、同年代の皆様は、仕事や家庭の事情等で、なかなか道場に行く機会が

少ないのではないかと拝察します。小生も六段受審を控えたこの数年間、定年退職を前にした業務過多（退職前の半年間だけで「病院不祥事」で2回記者会見したりしました）で平日はまず道場の時間に間に合うことはなく、土日は親の介護等でバタバタ（この3年で3名の親を看取りました）して、月に2度か3度、道場に行くのがやっと、という状況が続きました。

そんな中でも大きく力を落とすことなく受審することができたのは、道場外で素振りやタイヤ打ち、足腰のトレーニング等を行ってきたからだと思っています。

修道館でご指導いただいた小久保範士には、どこでも竹刀がなくてもできる素振りとして、「合掌素振りその1・その2」、「ゴルフグリップ素振り」といったものをご教示いただきました。道場に行けなくとも、竹刀がなくとも、稽古ができないわけではないと実感しています。

このように、なかなか道場に行く回数が少ないことに悩みつつ、できる範囲で稽古に励んできたわけですが、剣道再開後は三段受審を皮切りに、その後も受審を続けて今回六段に合格しました。大変ありがたいことに三段から六段まで、いずれも一度の実技審査で合格できました。学生時代の恩師や先輩方、また再開後に親身にご指導いただいた先生方のおかげです。特に「生涯剣道」を標榜して基本をしっかりとご指導いただいた故池田勇治範士には心から感謝しています。

色々と勝手なことばかり記してきましたが、素人の戯言かと存じます。率直に申し上げて、自分がまだまだ未熟であることは十分に自覚しております。今回頂いた段位に値する技量・品格になれるよう、また機会があれば上の段位に挑むべく精進したいと存じますので、皆様方には今後ともよろしくご指導の程お願い申し上げます。

(参考) 小久保範士の素振り指導

1. 合掌素振りその1

両手を合わせ（水月の高さ）、次に頭上に振りかぶり（額の上一握り上）、次に両手を鼻の前を通して水月の高さまで振り下ろす。

頭上に振りかぶった時の両手の位置が、正面打ちなどで竹刀を振りかぶった時の「左拳」のポジションであること。

頭上に振りかぶった時の両腕の肘が、軽く曲がっていること

上記を確認して、素振りをしながらこの2つを体の感覚として身に着ける。

2. 合掌素振りその2

合掌した右掌を半分前へずらした合掌で、両手の親指はそれぞれ別の手を上から抑えてはさむ。この合掌で前記の素振りを行う。

この素振りは、合掌しているが左手を使って振りかぶり、振り下ろすように

する。右手には力を入れない。

振りかぶった時、両腕は適度に曲がっているか。また、左拳のポジションは出来ているかを確認する。

3. ゴルフグリップで素振り

体の前で、左手で竹刀を握った形をつくり、人指し指だけ曲げずに伸ばす。その人指し指を右手の小指と薬指で、挟んで小指をからませ、右拳を左拳の上に乗せるようにする。このようにすると、竹刀を両手で握って構えた形に近くなる。

右腕の力を抜く。左拳の主働で「ふりかぶり⇒振りおろし」を行う。

左拳での「振り上げ⇒振りおろし」であることを確認する。右拳は左拳の動きに従っているだけで、右手は動きをリードしていないことを確認。

振り下ろした左拳の高さは、水落ちの高さまで振り下ろす。(正面打ちを打った時の左拳の位置です) 振り下ろすことは、切る動作になる。

振りかぶった時の左拳(こぶし)、打った時の左拳(こぶし)のポジションを体感で確認し、体得する。

4. 竹刀を持つての素振り

3で確認できたように左拳で振りかぶり、左拳で正中線を通して振り下ろす。

[振りかぶりの要領] 中段の構えから、左拳で竹刀の先を頭上に突き上げるようにして振りかぶり(左拳は鼻の前を通るようにして振り上げ、額の上頭上一握り上で止める)竹刀は後ろ45度になるようにする。右手は力を抜き、使わないようにする。

[振りおろし] 振りおろしも主として左拳で振り下ろす。右手は竹刀の動く(打つ方向)方向をリードするように働く。左手で振り下ろすと刃筋がまっすぐに動いて、有効打突の打ちになる。

大学剣道部との歩みの中で

藤田医科大学先端ロボット・内視鏡手術学 教授
中部医歯薬（学生）剣道連盟会長
稲葉 一樹（京都府立医科大学平成11年卒）

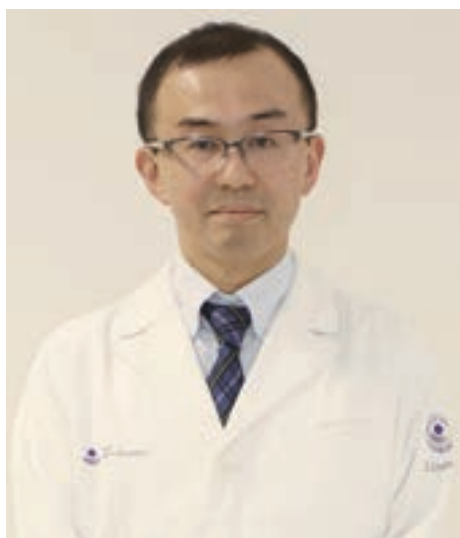


写真1：稲葉一樹写真

私は、平成11（1999）年、京都府立医科大学を卒業、現在は藤田医科大学先端ロボット・内視鏡手術学講座（食道胃外科）に所属する稲葉一樹と申します（写真1）。全日本医師剣道連盟事務局長の塚原清彰先生にご高配いただき、2024年に会員として頂きました。会員歴は2年、段位は四段、医師剣道家として名すらない私ではありますが、塚原先生から原稿作成を依頼頂きました。はなはだ僭越ではございますが、大学に所属する立場での剣道部・剣友会、中部医歯薬（学生）剣道連盟との関りが私の人生に彩りを加え、またそれらの組織作りと学生たちとの触れ合いでは交剣交人知愛

とも言えるような実に多くの学びがあり、それらをここに書き記させて頂きます。私の記事が、先生方のお目に留まるようでしたら幸いです。

1. 藤田医科大学剣道部副部長として

私が務める藤田医科大学には剣道部が存在します。その歴史は名古屋保健衛生大学（現藤田医科大学）が開学した昭和43年（1968年）当初から存在する本学では歴史ある部活動とされています。同剣道部は医学部以外に、医療科学部（医療検査学科と放射線学科）、保健衛生学部（看護学科とリハビリテーション学科）の学生が在籍しており、2025年度は総勢20余名の所帯となります。医学部のみならず他学部と交流ができること、大学・病院敷地内にあるアセンブリホールと呼ばれる体育館吹き抜け2階に剣道場があるので学校や仕事の終わり・合間に顔が出せる恵まれた環境であること、常日頃から医師・看護師・事務員など学園関係社会人とが混在した稽古と交流ができる事などが特徴です。

私と剣道部とのかかわりは2017年に遡ります。当時5年生だった剣道部員へ

の臨床実習・口頭試問の際に部活動の話が出た事をきっかけに剣道部の稽古見学に行くようになりました。様々な学部で構成される大学剣道部員と直接会ってお話をすると、授業中には感じられないような彼ら彼女らからあふれ出るエネルギー、実に多くの学びがありまして、いつもすがすがしい気持ちとなります。そうした触れ合いの中で徐々に剣道部に魅了され、稽古や試合応援など、剣道部の活動に参加することとなりました。その会話の中で、当時OBOG会があるとは言うものの、一旦大学を離れた先輩にとっては剣道部のみならず母校との絆を感じていただく機会が少ない現状を知ったのですが、現役部員にとっても先輩とのつながりをあまり体感できていないようでした。また、大学で仕事を続ける中で、大学内、大学病院内には剣道と剣道部の活動に興味を抱く職員が少なからず存在することにも気づきました。

教授職を拝命した2018年度に剣道部副部長を務めることとなりましたが私ができることは何かを考えた時に、真っ先に考えたのは、OB・OGと大学・病院職員が剣道部の活動に気軽に参加できる組織を創設することでした。藤田医科大学に勤務をされる剣道部OB先生のごつてを頼りに卒業生に連絡を取って頂き、2018年の剣道部追いコンに来て頂く事となりましたが、中には剣道七段の先生が数名OBにおられビックリしました。今まで新歓も追いコンも夜に学生だけが集まる飲み会だったようでしたが、せっかくの機会だからと昼に稽古会、夜の食事会形態に変更しました。その宴席で、「現役剣道部の健全な育成に寄与し、あわせて、会員相互の親睦を図ることを目的とする」会の創立を提案、多くの先生にその趣旨を賛同頂き、藤田医科大学剣友会という組織が設立されました。

実務的には、会の創立と共に預金通帳を作成、年会費と寄付金が集まったことで一定の予算をつけることができました。そこから現役部員への遠征費用・部員勧誘の補助を行うようになり、2019年（令和元年）には藤田医科大学への校名変更に伴う部旗と面手拭を作成、剣道部剣友会との合同稽古会の開催と学園内での広報活動、年1回の会誌作



写真2：2025年度 藤田医科大学剣道部卒業生歓送稽古会、部旗「剣心」とともに（2025/11/15）

成（部長・副部長・卒業生の寄稿、戦歴、活動報告など）、「藤医剣」垂れネームの作成（ちなみに学生垂れネームは「藤医大」）と卒業者への寄贈など、様々な活動が開始されました。剣友会メンバー構成が、過去藤田医科大学剣道部に在籍されたOB・OGの先生、藤田学園（大学、本院を含む関連4病院等）に在籍もしくは在籍された剣道を愛する社会人としていないことから職種は多彩で医師、看護師（長）、診療看護師（ナースプラクティショナー）、事務職員、さらには顧問弁護士らが大学剣道部の通常稽古に数名とはいえ常に参加頂く流れができたことで、学生と職員同士の交流が深められ、学生達にとっても日頃から社会人と接する事で在学中から本学でアセンブリ教育と呼称する専門職連携教育（IPE：Interprofessional Education）が行えているのではないかと感じています¹⁾。

また疎遠であった地域の剣道連盟（尾南地区剣道連盟²⁾、豊明市剣道連盟）との交流が増え、学生・社会人が共に地域の稽古会へ参加、年齢を問わずに段審査を目指せる環境が整備されました。学生・社会人との合同チームで地区剣道大会団体戦への出場、小中学生大会支援、地域の剣道家・子供たちを本学に招いた交流稽古会の開催（年2回、藤田医科大学稽古祭と呼称）など、社会貢献活動にも力を入れています。

2. 中部医歯薬（学生）剣道大会長として

さて、藤田医科大学剣道部が毎年心待ちをしている大会の一つが、中部医歯薬剣道大会です。本大会は北陸、東海、信州地区の医歯薬学部を中心とした医療系大学剣道部が一堂に会する50回を超える伝統ある大会となります。

中部医歯薬剣道連盟は毎年1回夏、学生剣道大会（団体戦、個人戦を同日開催）を持ち回りで開催しています。一大学で複数チーム出場（男子は5人戦、女子は3人戦）を認めていますし、個人戦トーナメントは経験を問わず、全員に出場資格を認めています。2024年度は15年ぶりに本学剣道部が主管となり愛知県春日井市総合体育館で第51回中部医歯薬剣道大会が開催され、私はその大会長を務めることとなりました。剣の心から新しい時代を切り拓く創造力を育んでほしい、その願いをこめて本大会のテーマを「剣心創造」と定め、



写真3：a 第51回中部医歯薬剣道大会パンフレット

「過去最高の大会」「皆さんの記憶に残る大会」を目標に掲げて、部員と共に準備を重ねて参りましたが、愛知県剣道連盟後援、本学剣友会、剣道部他関係する多くの方々のご支援、選手の皆さんのおかげで素晴らしい大会となりました。

大会には、13大学（名古屋大学、名古屋市立大学、愛知医科大学、藤田医科大学、愛知学院大学、朝日大学、岐阜大学、三重大学、金沢大学、富山大学、福井大学、信州大学、浜松医科大学）から約140名の学生が参加してくれました。



写真3：b 開会挨拶

すべてで熱戦となりましたが、本会では大会長の意向で個人戦とは別に初段以下新人個人戦の部を創立しました。その方式はトーナメントではなく予選をリーグ戦形式として誰もが最低2試合、同レベルの人と経験できる事としたのですが、審判長からの説示で新人戦に対して特別なお褒めの言葉を頂くなど団体戦、個人戦、新人戦の 카테고리を問わず、皆ご自身の力を出し切られたと感じています。

3. 中部医歯薬（学生）剣道連盟会長として

第51回大会終了後、2024年10月1日付けで、中部医歯薬剣道連盟会長を引継ぎ、就任することとなりました。

2025年度の第52回大会（2025/6/28静岡県磐田市総合体育館）では主管である浜松医科大学剣道部員、大会長の北濱義博先生（平成9年、浜松医科大学卒）とともに大会運営に携わりました。大会テーマは「心技招縁」と定め、本大会には昨年から金沢医科大学、松本歯科大学、静岡県立大学が加わり、15大学に参加頂きました。新人戦を含む個人戦は総勢152名、コロナ以降最高人数がエントリーされました。

本大会直前まで大会役員である浜松医科大学の学生さんとメール、LINEでの意見交換を頻繁に行う中、現役学生が剣道とどう向き合い、また本大会開催を何としても成功に収めたい、運営のノウハウを学びたい、日を迫うごとに高まる探究心と気概を知ることができました。大会前には試合会場の手配、進行計画、審判委嘱、役員手配と配置、パンフレット作成など準備が直前まで続き、また大会当日は、暑さと熱中症対策、試合の進行状況確認と試合場変更、場内アナウンスなど、役員としての臨機応変な対応が求められましたが、審判

先生を含めた大会役員の協力と団結力で彼ら彼女らは大会を成功させました。

大会開催中、私が会場をぐるぐる回って感じたことは、選手を応援する、仲間の動画を取る、談笑する、激励する、他大学の選手と交流する、私や役員に挨拶する、試合運営に支障が出ないように審判、選手、役員、皆が力を合わせて、運営に協力して下さったことでした。



写真4：第52回中部医歯薬剣道大会終了後、浜松医科大学剣道部員、北濱義博先生との記念写真（2025/6/28）

医療従事者として人生を歩まれる学生にとって、剣道での学び、経験、指導頂いた事は人生に必ず生かされると私は信じています。中部医歯薬剣道連盟に所属し、本大会に参加する事がこれから先の人生の中での素晴らしい経験と抛り所となるべく、連盟会長として尽力する所存です。

4. 最後に

本連盟報に寄稿される諸先輩方と大きく異なりますが、恥ずかしながら私が剣道において、唯一誇れるもの、それは「剣道をやめなかった」ことです。厳密にいうと、「やめた」と言わなかったことです。自分は卒後長らく、研究、悪性腫瘍・救急を含めた臨床、管理業務等、大学勤務がメインであったことを言い訳に、ここにおられる多くの先生のように剣道と向き合う時間をあまり作ってきませんでした。

その間、持病の咳喘息が悪化したり、勤務地変更があったりで、剣道をやめる決心は数え切れずあったのですが、地元剣道教室である日進



写真5：地元剣道教室である日進市剣道連盟山本允罔先生との記念写真（2024/11/13）

市剣道連盟³⁾を創立された私の師匠である山本允圀先生（写真右）はそのような私を叱る、でもなく、「やめなければいいのです」「来られるときに来てください」と言って、籍だけは残してくださいました。今振り返ると、この言葉には深い意味があると感じています。山本先生は「来なさい」「続けなさい」とは言わずにあえて「やめなければいい」と言われました。山本先生の考えからは、たとえ何年剣道から離れたとしても、周りがどう思おうとも、自分さえ「やめた」と言わなければ、やめていないことになるわけです。

その時は何も気づきませんでした。が、「やめなかった」ことで剣道を再びすることとなり、大好きになり、また大学剣道部・剣友会との出会いが加わり、中部医歯薬剣道連盟会長にも推挙いただき、県をまたいで多くの大学生とも触れ合うことができました。さらには全日本医師剣道連盟にも所属させて頂き、2024年度の横浜大会、2025年度の札幌大会では連盟合言葉である「交剣知愛」の喜びを体中に浴びて、日々の生活に活力を与えて頂いています。この場を借りて、先生方からのご指導とご縁に感謝するとともに、剣道そのものに深い喜びと憧憬を感じながらこれからも生きて行くことができればと思います。そして、本年の静岡大会に参加して多くの先生方とお会いすること、学ばせて頂く事をととても楽しみにしています。今回、このような執筆の機会を与えて頂いた野見山すすむ会長先生、塚原清彰先生、会報担当稲垣太郎先生、ありがとうございました。会員の皆様におかれましても、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

- 1) <https://www.fujita-hu.ac.jp/about/feature/>
- 2) <http://binan-kenren.com/index.html>
- 3) <https://nissinken-yukai.wixsite.com/kendo>

最近の若者と剣道新時代

青山 有



このたび投稿の機会をいただきました、青山有と申します。秋田大学卒業後に秋田大学腎泌尿器科医局に所属し、2025年4月より茨城県の水戸医療センター泌尿器科へ出向し医師10年目を迎えました。今回、「若い先生の投稿は盛り上がるので、是非！」と背中を押していただいたこともあり、若手（といっても30代半ばですが）剣道家が何を思い剣道と向き合っているか？について皆様にお伝えできればと思います。生意気な内容になってしまい恐縮ですが、ご容赦いただけますと幸いです。

<母校の学生を見て知る、最近の医学部剣道部事情>

2021年、後期研修先から大学院入学を機に大学へ戻った後、母校・秋田大学医学部剣道部の稽古にも顔を出し始め、いつからかコーチとしての活動をするようになりました。水戸に異動した2025年度も、月に一度は秋田に行って学生と稽古する機会を作るようにしています。

私が学生の頃、医学部剣道部は何故か体育会剣道部よりも稽古回数が多く、さらに高校時代に全国を経験しているような猛者ばかりが集まっていたので、とにかく「試合に勝つための稽古」に重きが置かれていた様に思います。私自身は実力も実績もないもののその流れに乗っかり、北医体や東医体での団体入賞など美味しい思いを沢山させていただきました。はたして卒後10年経ち、今の医学部剣道部はどんな集団になっているのだろうか？というのを探るところから、私のコーチ業が始まりました。

大きく変わったなと感じたのは、学生達の剣道に対する向き合い方です。現在でも北医体、東医体など、コロナ禍での中断はありながらも医学生の大イベントとして盛り上がりを見せていますが、彼らの中では「勝利が最大目標」という意識は昔ほど強くはありません。良い意味で「剣道は人生の数多くの興味の一部分」「剣道を楽しむ」というスタンスであり、剣道部以外のサークルや

アルバイト等にも熱心に取り組む学生が多く、大学で剣道しかやっていなかった私からすれば、マルチに人生経験を積んでいるその器用さに恐れ入るばかりです。また、ご存知の先生方も多いとは思いますが、医療系学生の授業・実習・進級は年々シビアになっており、部活動に時間と精神を割きにくいという現実があります。そういった状況も相まって部員全員が揃う稽古日は極稀になっていますが、この「本業を頑張ったうえで剣道も頑張る」という姿勢こそ、我々社会人剣道家として重要なメンタリティではないかと思えますし、学生達はすでにその域に達しているのではと感嘆する次第です。“今どきの学生は…”とはいつの時代も言われる言葉ですが、実は現代の学生は想像よりもずっと成熟しているのかもしれない。

<大学生への指導が生きた六段合格>

指導者の端くれとなったとはいえ、当時は私も六段を目指して自分の稽古もしなければいけない状況だったので、まずは学生に混ざって基本から地稽古まで一緒にやり通すようにしていました。医学部剣道部とはいえ高校で相当の実績を持った猛者もいますから、適当にごまかすような稽古はできません。高校生までの剣道から大人の剣道に変わる道筋の手本として、また乗り越えるべき壁としてどうすればよいかを考え、自分の剣道を見直し、「本物」の剣道を求めていくことは自分にとって大変有意義でした。2025年の2月、山梨での六段審査で合格させていただきましたが、この合格も学生達がいなければ成し遂げられなかったことだと思います。学生達に感謝するとともに、今後ますます学生の“壁”として立ちはだかつて行く所存です。

<剣道新時代に若手医師剣士としてどう向き合うか>

昨今、剣道界にも SNS・情報通信技術の波が押し寄せ、有名選手の指導をオンラインで受けたり、動画での技術発信が盛んに行われたりしています。小学生でさえも動画で研究し、中には自ら発信していく人もいた時代になりました。ですが、「試合・勝負に偏りすぎでは…」と感じるのは、私だけでしょうか？ 確かに勝利を目指して努力することは素晴らしいし、勝利から得る経験は計り知れません。しかしその陰には、「勝てないし、もういいや」と剣道から離れてしまう選手もいるはず。 “強くなるために” “試合で勝つために” といったコンテンツは大量にありますが、一方で「強くても弱くても剣道が続けると、こんないいこと・楽しいことがあるよ」といった様な、ある種の“救いの手”が少ないように感じています。

特に医学部剣道部の学生にとって、剣道の技量や実績が仕事に直結することはありません。競技力も大事ですが、せっかく医学部に進んでまで剣道を選ん

でくれた以上、剣道そのものの楽しさや魅力に気がついてほしいと思っています。そして、剣道部での活動を通して学べる組織運営や人間関係が将来の仕事で生きてくれば、と願うばかりです。もちろん卒業後も剣道が続けてくれば万々歳ですが、多忙な医療の世界においてはどうしても剣道のことなど頭から吹き飛んでしまう時期もあります。それでもいつか、「大学の剣道部、楽しかったな」「またやってみようかな」「子供にも勧めようかな」というOB/OGが出てきてくれば、微力ながら剣道界に貢献したということになるのでは…という願望（妄想）を持ち、これからも後進へ剣道の魅力を伝え続け、自身もさらに精進を重ねていきたいと思います。今後とも御指導御鞭撻のほど、よろしく願いいたします。



日立市・日鉾斯道館での稽古に参加させていただいた際の一枚

赤胴耳鼻科医奮闘記 ～先鋒戦～

名倉 巧真



はじめまして、愛知県の名倉巧真と申します。現在は医師5年目・耳鼻科3年目の若手として愛知県東海市の公立西知多総合病院に勤務しております。この度事務局長の塚原先生よりテーマフリーでの寄稿のお誘いをいただきました。ただ、ここ最近大会優勝や昇段等の華々しい成果は手に入れていないためアトラクティブな文章は書けませんが、医道と剣道両道の頂を目指す若手なりに今思っていることを徒然なるままに書き連ねようと思います。また、文達者でないため読みづらい部分もあるかと思いますが他の先生方練達の文章の合間に箸休め代わりにでもご一読いただけましたら幸いです。

まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。生まれは静岡県で幼少期よりチャンバラごっこが好きでしたのでその延長線上で小学4年生の時に剣道を始めました。そのまま中学・高校は静岡で、大学は名古屋大学で稽古に励み、大学6年生の時に五段を取得、現在は六段取得に向け仕事の合間に細々と稽古を続けています。

初期研修というウォーミングアップを終え、専門医試験という最初の関門に挑戦するまでの現在は団体戦で言うと先鋒戦でしょうか。試合に勝つためには先鋒が良い流れを作ることが不可欠です。良い先鋒とはどんな選手でしょうか？よく足を動かし、大きな声を出し、手数が多い積極的な選手だと私は思います。これは若手医師にも共通する部分があると感じます。フットワーク軽く手術室や病棟に現れる若手は上級医だけでなく他職種にも好かれるでしょう。若手のフットワークなんて軽ければ軽いほどいいですからね。ただ声がデカイだけの男は嫌われるかもしれません、分からないことをしっかり質問したり、術中に次に何をするかしっかり言語化して伝えたりする若手は指導医の先生も安心できるのではないのでしょうか。手術、外来、病棟管理、学会発表や論文作成など医師の日常業務は多岐に渡ります。まだどの方面が自分に向いてい

るかはわかりません。臨床だけ、研究だけと偏らずにいろいろなところに首を突っ込み、チャンスを広げたいと思います。また、1つ1つの症例もとても大切ですが数を経験することで成長する部分もあると思います。「強い人は弱い人よりもたくさん竹刀を振ってきた」、当たり前のことかもしれませんが医道でも剣道でも1本でも多く丁寧に竹刀を振れるよう精進したいと思います。以上のように多少強引な部分はあるかもしれませんが良い先鋒と良い若手には共通点があるように思います。学生時代は苦手なポジションでしたが医道ではまずは良き先鋒となれるよう行動していきたいと思います。

2026年4月からは母校でもあります名古屋大学病院勤務となります。「忙しくなるよ～」と先輩たちに脅されています（笑）。ただ良き師がたくさんいることは間違いのないため、環境や相手は変わりますが、剣道で培った平常心で戦い、成長したいと思います。休みの日は旅行より稽古に行きたい性分なのでお近くにお住まいの方はぜひ稽古つけてください。

今後そう遠くない未来に次鋒戦が控えています。次鋒でポイントを取れば試合の流れがぐっと良くなりますが、試合巧者や曲者が潜むポジションです。医師として脂がのり個性が出てくる時期に足元をすくわれないよう初心を忘れず、良い流れを持ってきたいと思います（もし次鋒戦寄稿の機会があれば少しでも成長した私をご披露できるよう頑張ります）。

塚原先生にお誘いいただき全日本医師剣道連盟に入会させていただいたのが約3年前になります。雲の上の存在の先生方と駆け出しの若手が貴重なご縁をいただけたことはかけがえのない財産です。稽古会等で多くの先生方に稽古をつけていただいております。この場をお借りしてお礼申し上げます。「一期一会」や「交剣知愛」など剣縁を表す言葉は多々ありますが、改めて剣道が続けていてよかったです。座右の銘である「一生剣道」を胸にこれからも続けていきたいと思います。

手元の剣道連盟名簿を見てみるとおそらく私が最年少になるかと思います（間違っていたらすみません）。若手としてこの会を少しでも盛り上げていけるよう尽力いたします。稽古会で下座に並んでいる赤胴剣士がいましたらおそらく私だと思いますのでお気軽にお声掛けいただけましたら嬉しいです。

まとまりのない文章になりましたがここまで読んでくださりありがとうございます。最後になりますが今回このような寄稿文を書く機会を与えてくださいました事務局長の塚原先生をはじめ、全日本医師剣道連盟の先生方に心より感謝申し上げます。若輩者ですので剣道、医道ともに今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

AI とアンチハラスメントの時代

全日本医師剣道連盟事務局長
東京医科大学・耳鼻咽喉科頭頸部外科学分野 主任教授
塚原 清彰



最近の AI 発展は目覚ましいと感じます。知りたいことをすぐに調べ、教えてくれます。英語論文の PDF を開き、PC に「この論文まとめて」と入力すれば、箇条書きにしてすぐ教えてくれます。「他の導入化学療法と比べて」など、少し面倒な指示を出しても、すぐにまとめてくれます。今までは自分で PubMed を検索し、論文を引き出し、膨大な時間をかけていた作業は簡単に終わるようになりました。仮にスタッフに同じ依頼を出せば「えーっ」という表情と共に、「今忙しいので…」「私にはとても…」などと言われるのは想像に易いですが、AI は文句を言いませんので、嫌な顔と向き合うストレスからも解放されます。むしろ「お手伝いできることはあります

すか」と丁寧に尋ねてくれ、なごみます。しかし、文化や真の実力というのは「無駄と思われる過程」にこそ含まれています。先ほど述べた論文の話でも、実は AI が省いた部分から予備知識として学ぶことも多いわけです。人間関係でも、依頼を出し、行ってもらう過程で相手の性格、能力が分かります。剣道も you tube で学ぶ実践テクニックより、道場での師範、仲間との交流のより、「剣風」の大部分が作られるのではないのでしょうか。流れのはやい現代、タイパ（タイムパフォーマンス：短い時間で効果や満足度を得られるか）重視はやむをえませんが、手が上がらなくなるまでの膨大な素振り、いつ終わるか分からない掛かり稽古、師範との入浴でのほせるまで出ることのできなかった風呂など、当時は意味があるのか疑問に感じていた多くのことが、私自身を育ててくれたことが今は分かります。そして、タイパと過度なアンチハラスメントの現代に対し、文化が失われ、味気なくなったと感じるのは、自分が年を重ね、

「若者達の文化」と離れてきたからかもしれないとも愚考します。

AI を使用して思うことは、「言語化しての指示が必須」で、指示を細かくすればするほど有能な働きをするということです。言い換えると、高性能な指示待ちスタッフです。一方、AI 自らプラスアルファの作業をしてくれることはありません。そのため、「言語化が得意で、次々的確に細かな指示を出せる人」には極めて有能なツールですが、「言語化が苦手で、自分で次の行動 (AI への指示) を考えられない人」が使っても十分な力を発揮できません。とすると、言語化「できる人」と「できない人」でどんどん差が開いていくはずで、俗にいう二極化となります。有能な部下は、「先読み能力」が優れていて、1 を言えば2も3も準備、行動してくれます。つまり、何時も「考える」「(少なくとも頭の中では) 次の課題を言語化する」という作業をしています。そういうタイプは「次に必要、と先読みした事項を AI で調べる」ことができ、その余った時間でさらにその先を考えるという流れになります。逆に、指示待ちタイプは先読み能力がないから指示がくるまで動かない (どう動いていかわからない) とも言えます。そして、私から指示された内容を AI に入れ、回答して、次の指示を待ちます。それでは私自身が AI に聞くのと同じです。私は文句言わず、いつも全力の AI に直接聞くことになりますから、指示待ちスタッフは仕事と居場所を失います。その解決策を AI に聞いても、残念ながら、その回答を実践することはできないでしょう。AI によれば「先読みに必要なのは、観察・結果からの逆算・リスク管理」で、それができないからこそ指示待ちしているのです。私の教室には剣道部 OB が5人いますが、皆、気遣いと先読み能力に優れています。長い剣道部生活で培われた観察能力、胆力、我慢のお陰だと思えます。最近、剣道人口が減ってきているのは皆様感じていると思いますし、私が通う道場、稽古会も、52歳の私より若い人は少数です。率直なところ、私など、いくら稽古しても剣道が上達しませんし、タイパ重視の若者には好まれないのも分からなくありません。

さて、栄枯盛衰は世の常ですが、米国では「ブルーカラービリオネア」という現象が起きています。従来、ホワイトカラーと言われた頭脳仕事が AI に変わられる一方、大工、配管・電気工事などは AI が行うことができないため、希少価値があがり、莫大な富を得るようになってきているのです。AI と過度なアンチハラスメントの時代だからこそ、タイパが悪くても、修業に苦勞しても、剣道という中で身につけた文化が社会に必要とされるのではないかと思います。若い世代にどう伝えるか悩みますが、AI に聞いても私が望む答えは出ません。

鹿児島大会（第60回大会）告知

第60回全日本医師剣道大会 鹿児島大会 ご案内

第60回大会会長 諸木 浩一



2027・平成9年鹿児島にて第60回全日本医師剣道・鹿児島剣道大会を開催いたします。

鹿児島での開催は1998年平成10年11月21日に楠元忠雄範士八段を会長に小生が事務局長との中で第33回剣道大会を鹿児島アリーナで開催されましたが当時楠元先生が体調を崩されましたが、副会長の水枝谷先生が代行され、無事に開催出来ました。

前回の開催場所の鹿児島アリーナが今年より改装が始まり、令和10年まで工事中にて会場選択が限られ、鹿児島市内の体育館を第一選択に状況によっては空港近くの体育館での開催に向けて奮闘しております。

また開催時期に関しましても現時点では未定ではありますが、色々ご意見を伺いながら調整して決定したいと考えております。

遠方にて土曜日昼より開始、日曜日の昼過ぎまでを考えております。

大会のタイムスケジュールは限られた開催時間の中でなるべく稽古時間を多くとれるように稽古主体の大会を目指しております。無理のないように稽古に参加いただければと思います。

鹿児島は台湾と韓国との直行便が運航しておりますので、国際的な参加をお願いする次第です。

土曜日の懇親会は焼酎三昧と語らいの時間をとれるようなスケジュールを計画したいと思っております。多くの皆様に参加をお願いいたします。

**第33回
全日本医師剣道大会**



期日 平成10年11月21日(土)・22日(日)
会場 鹿児島アリーナ

事務局からのお知らせ

- ①全日本医師剣道連盟ホームページ
<http://japan-medical-kendo.jp>



- ②連絡先
全日本医師剣道連盟事務局 塚原清彰
住 所：〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1
東京医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野内
F A X：03-3346-9275
e-mail：tsuka@tokyo-med.ac.jp

入会、退会、ならびに連絡先・段位・称号・連絡手段などに変更がある場合、次のページのPDFを使用するか、上記のメールアドレスまでご連絡下さい。
※PDFは、全日本医師剣道連盟ホームページ ⇨ 連絡用書類 のページからダウンロードできます。

- ③年会費
年会費（1万円）を下記口座にお振り込みの程よろしくお願ひします。
なお、依頼人名には会員の先生のお名前をご記入ください。
振込手数料は各自でご負担願ひします。

振込先：みずほ銀行
新浦安支店（店番号 342）
普通 1984793
全日本医師剣道連盟事務局
（ゼンニホンイシケンドウレンメイジムキョク）

- ④寄付
ご賛同の会員の先生は、ご寄付をよろしくお願ひいたします。
協賛費は金額を問ひません。
振込先は年会費と同じです。

会員登録・変更の手続き

全日本医師剣道連盟 連絡用 PDF

入会、退会、ならびに連絡先・段位・称号・連絡手段などに変更がある場合、この PDF に記載して、以下のいずれかの方法で連盟事務局にお知らせ下さい。

1. FAX する。 03-3346-9275
2. e-mail : tsuka@tokyo-med.ac.jp に添付して送る。
3. 郵送する。 送付先：〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-7-1
東京医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野内
全日本医師剣道連盟事務局 塚原清彰

いずれかに○	入会 ・ 退会	段位・称号変更	住所変更	電話番号変更	メールアドレス変更
--------	---------	---------	------	--------	-----------

以下のすべての項目に記載し、変更点のある場所を大きい○で囲ってください。

ふりがな

氏名

生年月日（西暦）

出身大学

段位称号

郵便物送付先住所（いずれかに○ 自宅 ・ 勤務先） 〒

携帯電話番号

固定電話番号

メールアドレス

備考

全日本医師剣道大会記録

回次	開催年	日程	開催地	大会会長
第58回	令和7年	6/14 - 6/15	札幌（北ガスアリーナ札幌46）	池澤 清豪
第57回	令和6年	5/31 - 6/1	横浜（神奈川県立武道館）	野見山すすむ
第56回	令和5年	4/8 - 4/9	新潟（県立ふれあいプラザ）	荻荘 則幸
第55回	令和4年	4/16 - 4/17	沖縄（沖縄県立武道館）	奥島 憲彦
第54回	令和元年	5/18 - 5/19	東京（東京医科大学記念館）	稲村 征夫
第53回	平成30年	4/14 - 4/15	岩手（北上市総合体育館）	菅 義行
第52回	平成29年	4/8 - 4/9	高知（高知県立武道館）	谷木 利勝
第51回	平成28年	4/2 - 4/3	茨城（つくばカピオ）	大祢 廣伸
第50回	平成27年	4/11 - 4/12	京都（京都市武道センター）	吉村 了勇
第49回	平成26年	6/5 -	長崎（長崎県立総合体育館サブアリーナ）	萬木 信人
第48回	平成25年	6/22 -	宮城（仙台市青葉体育館）	今村 幹雄
第47回	平成24年	4/7 -	鳥取（鳥取県立武道館）	飯塚 幹夫
第46回	平成23年	4/9 -	東京 — 東日本大震災により中止 —	伊藤 元明
第45回	平成22年	4/10 -	三重（県営サンアリーナ）	中山 尚夫
第44回	平成21年	5/23 -	千葉（千葉ポートアリーナ）	遠山 富也
第43回	平成20年	4/19 -	兵庫（兵庫県立武道館）	松井 英互
第42回	平成19年	4/7 -	大阪（豊中市立体育館）	宮坂 昌之
第41回	平成18年	4/15 -	神奈川（相模女子大体育館）	野見山すすむ
第40回	平成17年	4/16 -	大分（大分県府市民体育館）	広瀬 信道
第39回	平成16年	4/17 -	大阪（大阪コスモスクエア国際交流センター）	鏡山 博行
第38回	平成15年	4/5 -	福岡（宗像ユリックス）	加野 資典
第37回	平成14年	9/14 -	札幌（札幌市総合体育館）	道下 俊一
第36回	平成13年	4/14 -	熊本（熊本大学総合体育館）	笹原 登
第35回	平成12年	4/15 -	広島（広島県立総合体育館武道場）	十河 勝正
第34回	平成11年	4/3 -	東京（東京医科大学記念館）	山崎 衛
第33回	平成10年	11/21 -	鹿児島（鹿児島アリーナ）	楠元 忠雄
第32回	平成9年	9/14 -	岩手（岩手県営武道館）	中村 好和
第31回	平成8年	9/22 -	沖縄（沖縄県立武道館）	永山 薫
第30回	平成7年	4/9 -	愛知（江南市民会館）	村瀬 守男

回次	開催年	日程	開催地	大会会長
第29回	平成6年	10/16 -	東京（東京医科大学記念館）	宮地 誠
第28回	平成5年	10/10 -	福岡（県立久留米体育館）	熊丸 治
第27回	平成4年	9/27	香川（高松市総合体育館）	畠瀬 修
第26回	平成3年	4/17	京都（京都市武道センター）	横関 誠夫
第25回	平成2年	9/23	茨城（つくば第3県民センター）	大瀨 一郎
第24回	平成元年	9/15	宮城（仙台・県武道館）	鈴木 仁一
第23回	昭和63年	9/11	鳥取（米子・市民体育館）	中曾 栄吾
第22回	昭和62年	4/4	東京（東京医科大学記念会館）	大瀨 一郎
第21回	昭和61年	9/14	京都（京都市武道センター）	根本 浩介
第20回	昭和60年	9/15	千葉（千葉県武道館）	綿貫 重雄
第19回	昭和59年	10/27	岡山（岡山武道館）	日下 連
第18回	昭和58年	4/9	大阪（久保田鉄工中央体育館）	中村周吉郎
第17回	昭和57年	10/10	広島（キリンビール広島工場体育館）	藤井 実
第16回	昭和56年	11/7	静岡（市民体育館）	内田 智康
第15回	昭和55年	5/25	長崎（市民体育館）	前田 信良
第14回	昭和54年	4/8	東京（東京慈恵会医科大学体育館）	海老原千春
第13回	昭和53年	9/23	愛知（名古屋・愛知県スポーツ会館）	三輪田 薫
第12回	昭和52年	11/13	山口（下関市立山ノ田中学校体育館）	桃崎 正香
第11回	昭和51年	5/16	新潟（県立総合体育館）	外山 司郎
第10回	昭和50年	4/6	京都（武徳殿）	
第9回	昭和49年	5/25	熊本（県武道館）	笹原 登
第8回	昭和48年	10/13	札幌（札幌体育館）	内藤 詩郎
第7回	昭和47年	9/15	高知	川田 茂宏
第6回	昭和46年	4/3	東京（日本武道館）	伊藤 京逸
第5回	昭和45年	10/24	京都（武徳殿）	高岡 謙次
第4回	昭和44年	8/15	宮城（仙台・県立スポーツセンター）	松川 金七
第3回	昭和43年	2/18	東京（衆議院第一議員会館剣道場）	伊藤 京逸
第3回	昭和42年	4/1	名古屋（名鉄体育館）	伊藤 京逸
第2回	昭和38年		大阪（大阪城内・修道館）	伊藤 京逸
第1回	昭和34年		東京（後樂園・全剣連・中央道場）	伊藤 京逸

編集後記

全日本医師剣道連盟報 第34号をお届けいたします。

令和7年を振り返りますと、不人気の中で開幕した大阪万博は閉幕時には大盛況となり、また10月には大混迷となっていた自民党政権も、本年2月には衆議院で単独過半数を得るに至りました。世論の振れ幅の大きい一年であったと感じております。スマートフォンを開けば否応なく情報が入ってきます。情報弱者になりたくはありませんが、情報に溺れて流されてしまうことも避けたいと思っています。複雑です。

本報では、日本剣道連盟会長・真砂威先生より「剣道の理念」について、敗戦から80年という節目の年に寄せた原稿を賜りました。また、第59回全日本医師剣道大会（静岡大会）「いいら！静岡」会長である笠松紀雄先生からの告知およびプログラムを掲載しております。

第58回全日本医師剣道大会（札幌大会）を開催された池澤清豪先生から開催記をいただきました。また、同大会の年代別個人戦で優勝の榮譽に輝かれた越智小枝先生（女子）、吉田悠人先生（20代～40代）、武石浩欣先生（50代）、中村茂樹先生（60代）、諸木浩一先生（70代）に加え、団体戦優勝を果たした北海道チームを代表して船越匠先生からもご寄稿をいただいております。

また、全日本医師剣道連盟稽古会の様子について、森俊樹先生（9月）、萩原幸彦先生（11月）よりご報告いただきました。充実した稽古会の様子が伝わってまいります。

幹事の交代があり、新たにご就任された永山盛隆先生、ご退任された奥島憲彦先生よりご挨拶を頂戴しております。

今回は幅広い世代から8名の先生方にご寄稿いただきました。池澤清豪先生、林明人先生、大西司先生、牟田幹久先生、谷上博信先生、稲葉一樹先生、青山有先生、名倉巧真先生、各先生のお考えや取り組みに深い感銘を受けております。

最後に、諸木浩一先生から第60回全日本医師剣道大会（鹿児島大会）の告知がございますので、ぜひご覧ください。

本年も年報作成にあたり、多くの皆様にご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。今夏も暑くなることが予想されますが、6月の静岡大会では皆様が万全の体調で臨まれることを願っております。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

令和8年4月

事務局長補佐 稲垣 太郎



令和8年4月

【事務局】

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1
東京医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野内
事務局長 塚原 清彰

FAX : 03-3346-9275

e-mail : tsuka@tokyo-med.ac.jp